

3 月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
3月号
No. 597

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





枝を前へ

△表紙の花▽ 仙溪

早春、また雪の降る寒い時期に満作は咲く。黄色の細い花弁がクシャクシャと丸く集まったような花。不思議な花である。花満作の名前で花屋で売られるものは、花が大きくて香りの強い支那満作の仲間だそう。表紙でいけた満作は、よく見ると花の色と大きさが違う二種類を混ぜていけている。

満作の花を目立たせたかったのだ、右前方に長い枝を三本集めている。2月号の青文字の盛花と同じような前方へ枝を出す花型である。

満作で水際をつくり、その後ろにアマリスの花と葉を覗かせた。アマリスは葉で花の茎をある程度隠すようにするといひ。

花材 花満作（満作科）

アマリス（彼岸花科）

花器 白色釉陶深鉢

弾むように

△2頁の花▽ 櫻子

白い手毬のような花が弾むように並んでいる。弧を描いて垂れ下がる小手毬の枝は、優雅な空間をつくりだす。長めに使った小手毬がつくる空間の内側に花を入れるのも面白いのだが、飾る場所が大きい場合は枝を短く切り分けて、足もとを少し撓めながら花瓶に投入にすると、



花がきゅと集まって豪華な感じになる。

噴水のように入れた小手毬の動きに添わせるように、紫の濃淡のスイートピーを入れると花が弾み出てくるようだ。この優しい色の広がり、シンビジュームをアクセントに加えた。小手毬の葉の緑も重要な要素になっている。

花材 小手毬（薔薇科）

シンビジューム（蘭科）

スイートピー二種（豆科）

花器 青色細口陶花瓶

伸び上がる

△3頁の花▽ 櫻子

三種類の薔薇をいけたくてあれこれと考えていたが、ビバーナムの濃青色の実をみつけたので、とりあわせてみた。ところが実の色が暗いため薔薇の鮮やかさが沈んでしまう。そこで白のカラーを加えることにした。清楚な白い花とみずみずしい緑色の茎が爽やかで、全体が明るくなった。

カラーの茎の線をどこから見てもそろっているように立てると、力強く上に伸び上がる勢いが生まれる。線をそろえるためには茎の曲がりを真っ直ぐになおす技術が必要だが、他の花材では出せない魅力がある。

花材 カラー（里芋科）

薔薇三種（薔薇科）

ビバーナムの実（忍冬科）

花器 四足陶花瓶



啓翁桜

花型 草型 副流し

花器 青銅薄端

先月号のテキストに櫻子の新聞記事を転載したが、その中に冬の木々はすでに春の芽吹きに「備え」て準備をしているということが書かれている。その上で「何でも簡単で便利になった現代人は、それを（備えが大切なことを）忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えていて、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります」と云っている。

まことにその通りだと思つ。

今年も桜の季節が近づいてきた。鴨川の染井吉野の花芽が膨らんで、薄紅色の蕾が顔を出すのももうじきだ。春はもうそこまで来ている。

啓翁桜の生花を薄端にいけた。薄端は水面を広く見せることができるので、生花の水際立った美しさがより引き立って見える。





③ 真の枝を入れる。真の分かれ枝を撓めて真囲いや見越にしている。



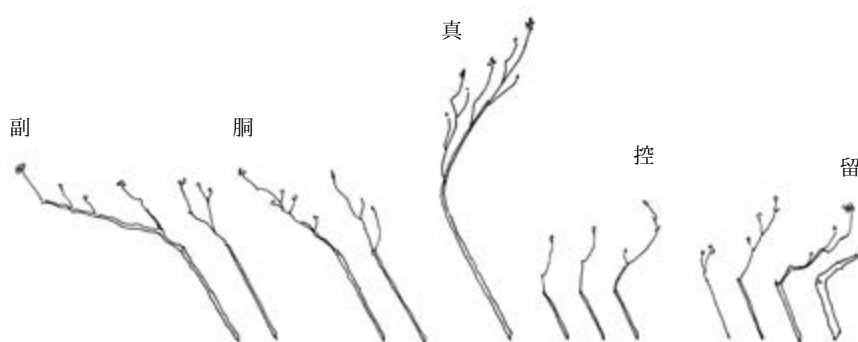
① 副流しの副には横へ伸び出た枝を選ぶ。副の出口までの足もとは真っ直ぐにしておく。枝先は左手前へ振り出す。



④ 留を入れる前に、くさび撓めをした太めの幹を入れたところ。この幹のうしろから総囲い、留、留の沈み、控の沈み、控の順に入れ、横配りで留める。(4頁の花)



② 副のとなりに銅を入れる。銅の枝先は前方へ。銅のうしろに副の沈み、銅の沈みを入れる。



又木配りをかけたところ



健一郎の木瓜の生花

花型 草型 副流し

花器 竜手附青銅器

一月十九日、廬山寺での父の葬儀には、祭壇の前に私の松の立花と、健一郎の木瓜の生花を供えた。木瓜には棘があるので本来は避けるべきところだが、父は健ちゃんの木瓜の生花がとても好きだったので、棘など気にせず喜んでくれたのではないかなと思っています。

この頁の生花がその時の木瓜の生花である。葬儀の前日の夜、私と二人でいけたのだが、私の立花も健ちゃんが手伝ってくれた。師範の竹中慶恒くんと一緒に松葉を掃除したり、合釘で枝をつけた。今までは父の助手をつとめてきた私が、今度は私が健ちゃんを助手にする日が来たのだ。父も母も天国から見てくれていたような気がする。「おー健ちゃん、やっとうるやっとうる」そんな嬉しそうな声が聞こえる。



仙溪の松の立花

花型 行型

花器 青銅立花瓶

左の写真は今年の「冬の旅・京都名流いけばな展」の花だが、これは廬山寺での父の葬儀で祭壇の前に備えた私の松の立花を手直して、父の花として出品させていただいたものである。

とり合わせは

松……真・副・請・流枝・前置

水仙……正真

白梅……控枝・胴

晒木……見越

寒菊……胴

紅椿……あしらい

となっている。

この立花瓶は父が大切にしていた器の一つで、広い水面からすくと立つ水際が美しく見える器である。今後もここ一番という立花を立てる時に、大切に使用したいと思っている。

京の冬の旅

京都名流いけばな展

1/29〜2/3

京都駅新幹線コンコース

桑原仙齋（写真①）

松 梅 水仙 椿 晒木の立花

松本慶季（写真②）

紅梅・水仙・白椿・苔木



生花の器

「薄端」 うすばた

四頁の啓翁桜の生花に青銅の薄端を使ったので、薄端花器について紹介する。

「薄端」を大辞林で調べると、

①銅拍子口花瓶の縁が水平に大きく開いたもの。

②瓶形の胴に、中央に生け口があり縁が水平に大きく開いた上皿を入れるもの。重ね薄端。

となつてゐる。

銅拍子どひょうしというのは打楽器の一つで、中央が碗状に突起した青銅製の円盤二個を両手に持って打ち合わせるもの。廬山寺での父の葬儀でも説經の間に銅拍子にようち（仏教儀式では鐃鉢にようちという）を鳴らしておられたが、西洋のシンバルに似ている。

①の解釈では口の広い立花瓶も薄端と呼んでいい。七頁の立花に使っているような器がそれである。

②の説明は重ね薄端のことである。四頁に使った薄端がそれで、下の写真のように上下が分かれている。水は皿の部分だけに入れて使う。この龍の手のついた胴の部分は、皿の部分を使わずに単独で使うこともできるようになっている。胴の前後には翁と鳥の装飾があり、足は五本になっている。

いささか装飾的すぎる感じがするので父はあまり好んで使わなかった



が、生花をいけるために考案された器なので、いけてみると独特の緊張感が生まれる。流儀によっては水を少ししか入れないところもあるようだが、広い盤面いっぺいの水から立ち上がる美しさを楽しみたい。

薄端は流儀の作風や時代の好みを強く反映して、龍耳、獅子耳、波足、亀足、朝顔、蓮など、耳や足や口造りの意匠にさまざまな工夫がなされている。

左の図は薄端の代表的な形である。なかでも「御玄猪」は池坊四十一世専明が考案したもので、宮中に献上される亥の子餅（玄猪餅）が丸三宝の上に載せられていたのをもとにして考案した薄端である。

各流儀の家元の好みの薄端が創案されていて、御玄猪のほかにも、末広型（松月堂主古流）、香炉型（遠州）などは流儀専用の薄端花器といえる。（参考：『伝承のいけばな生花』主婦の友社 図は同書より転載）





立てる・広げる・隠す

仙溪

「カルノシャルロット」という。この頁の大輪の花の名前だが、ラナンキュラスの一品種だそう。なんとも美しい花である。

見ていると自由に伸ばしてあげたくなかったので、赤いガラス花瓶に投入することにした。とり合わせる花を悩んでいると、櫻子が別の花屋で買ってきた濃赤色のチューリップを使っているよ、ということ。チューリップを後方に立てて、ラナンキュラスを前方へ広げていけば、足もとをアンズリウムの小葉で隠した。

チューリップとラナンキュラスと花器。それぞれの赤色が互いの色合いを強めている。そこにアンズリウムの動きのある葉が加わることで、ぐっと景色が面白くなった。

立てる、広げる、隠す。それぞれの花材に役割をもたせて、自然体でいけているが、色合いも、とり合わせも、花型も気に入っている。偶然の出会いから生まれた花だが、この雰囲気を感じておこう。

花材 ラナンキュラス（金鳳花科）

チューリップ（百合科）

アンズリウムの葉（里芋科）

花器 赤色ガラス花瓶



盛花と投入

仙溪

剣山にさしていける盛花と、花器にもたせかけていける投入は、いけている時の感触が微妙に違う。

いけばなを習い始めのころは花器に留めにくい投入よりも、角度や向きを思いのままいけられる盛花のほうがいけやすい。投入で枝や花を形良くいけるのには、経験を積まないと身につかない「勘」が必要になるが、この勘が身につき始めると投入の楽しさに気付くことになる。

枝のある程度自由にとめられるようになってきて、今は「手を離す」ことを楽しんでいる。枝に必要な仕掛けをして花器に入れてみる。その時に器と枝が偶然にどんな空間をつくってくれるか。主導権を枝にあずけるような気持ちで「手を離す」のである。その時にいい表情を見せてくれるかどうかは、こちらの技量次第ともいえる。仕掛けがなかなかうまくできずにもたもたと枝をいじっていると、枝もくたびれてしまう。是非とも数多くいけて経験を積み、「手を離す」楽しさを味わってほしい。

自然体で

△10頁の花▽

仙溪

今月のテキストにはシンビジウムを二種使っている。二頁の直立型・臙脂色・小型と、この頁のキャスケード型（下垂型）・淡緑白色・大型。二頁のは切り花で、この頁のは鉢植から切っつけていけている。



キャスケード型のシンビジュームは立ち上がった茎が途中で曲がり、その先に花が沢山ついているので背の高い器に投入するのが自然なわけだろう。作例に使ったのは一本だが、花器に入れただけでもかなり存在感がある。あとはシンビジュームと原産地の近いグロリオサを二本添えて、自然体の投入にした。

花材 シンビジューム（蘭科）

グロリオサ（百合科）

花器 青色釉陶花瓶

立てる・集める・隠す

△11頁の花▽ 桜子

9頁の家元の投入が「立てる・広げる・隠す」いけばなであるのに対して、「立てる・集める・隠す」を意識していた花。ライラックは切り花では水揚げの悪い花で、いける時には必ず足もとの皮を削っておく。そのようにした上で作例のように短く集めていけると、一旦水が揚げれば結構長持ちする。色を集めるように使うのに向いた花材だと思う。カーネーションとライラックだけではふわふわした感じになるので、引き締め役にシグレイプの色づいた葉を加えた。

花材 カーネーション（撫子科）

ライラック（木犀科）

シグレイプ（蓼科）

花器 濃紺ガラス花器



二種でいける 桜子

今月のテキストには七作の投入盛花があるが、そのうち四作が三種類の花材でいけられていて、のこり三作は二種類の花材でいけられている。それぞれを見直すと、なるほど三種でいけられた花はそれぞれに役割があつて、二種では物足りない。それは面としての葉であつたり、季節感を加えるためのワンポイントとしての実であつたりしている。

いけばなは花材の種類が多くなるほどそれぞれの個性は薄れていく。とり合わせを考える時は、互いの個性が際立つような組み合わせを大事にしたい。もし二種で納得のいく組み合わせをみつけたら、余計なものを入れずに花型を工夫することで充分見応えのあるいけばなになる。

青いガラス器の上に雪柳の枝を四方へ広げておいてその中にアネモネをさしてゆく。

春を告げてくれるアネモネは色鮮やかで大好きな花の一つ。茎の曲がりも面白く、咲いたときのことを考えながら長短をつけていける。赤い敷物に飾るとアネモネの赤色がより強さを増してくれる。雪柳とアネモネ数色。私の好きなとり合わせだ。

花材 雪柳（薔薇科）

アネモネ（金鳳花科）

花器 青色ガラス花器

「仙齋彩歳」をつくって

手前味噌で恐縮だが、父の文章といけばな写真をまとめた「仙齋彩歳」をお届けした皆さんから多くのお礼のお言葉をいただいた。「読み直したい」と思っていたので、大変嬉しい「家宝にさせてもらいます」などと感激の言葉を頂戴するたびに、「お父さん、聞いているか」と父に呼びかけている。

短時間でつくったことにも驚かれるが、まずパソコンに保存している文字データを元にレイアウトをやり直し、それを妹（はな）が過去の「テキスト」と全て照らし合わせてくれたのが第一段階（最終校正で文章が入れ替わっていることがあるため）。その後櫻子と選択作業をしつつ数人のスタッフに校正を依頼。途中、健ちゃんにレイアウトの駄目だしをもらつたお蔭で文章の少ないページに父の思い出の写真を加えることを思いつく。印刷の西湖堂さんも分分钟に対応してくれた。正月明けの余裕のある時期に集中して作業できたことも幸いだった。

かくして「仙齋彩歳」は一冊の本にまとまつた。今は父の文章を見返す度に涙があふれてしまう。流内の皆さんもおそらく同じだろう。泣いたり笑ったりしながら何度も読んでほしい。父は皆さんが望む時、いつもそばにいてくれる。「よっ！元気でやつてるか！」につっこり微笑んで。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2014 年

3 月号

No. 609

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





雪の中で

△表紙の花▽ 桜子

今年の立春は、前日に比べて急に気温が下がって真冬の寒さが戻ってきた。

その週末の岡山行きの新幹線は、京都の雪も溶けていたので、安心して乗り込むと姫路辺りから雪景色になってきて、相生、岡山と雪は降り続く。

いつもなら京都に雪が積もっていても、晴れている土地なのに。珍しい風景に何度も写真を撮った。岡山駅に着くと改札辺りは大混雑、電車の発着も大幅に遅れていた。

2月は結局3週間近く寒い日が続いた。

1月の下旬にいった雪柳とチューリップの盛花は、春の温かな兆しを感じるようにといたたのに、まるで雪の中で咲いているようだ。

少しでも花が開くように雪柳の足を割って、皮を削って枝を少し短めにして剣山に挿し直している。そうすることで再び寒い日が続いて来ても最後まで力強く咲いてくれる。

雪の中でタクシーを長い間待ち続けて、やっと稽古場にたどり着いた。今そんな事を思い出しながら、この花の原稿を書いている。

花材 雪柳（薔薇科）

チューリップ（百合科）

プリムラ・ポリアンサ

（桜草科）

花器 白色陶鉢

器の選択

△2頁の花▽ 桜子

連翹の花を見ると、春のやわらかで温かな日射しを感じる。オレンジ色の立派な薔薇を取り合わせて、アンスリウムの小葉でみどりを足した。

いけばなで最も大きなウエートをしめるものに器がある。いい花材で、いい取り合わせで、いけ方にも工夫があるのに、何かハツとする感動がない場合は、器の選択が良くないことが多いように思う。

逆にとてもシンプルないけばなののに、なにか心に残る趣がある場合は、器の選び方が抜群だったりする。いけばなの印象は器によって左右されると言ってもいい。

いける技術を磨く一方で、もっといける器についても研究する必要があると思う。

この三月に、京都のやきものの窯元との企画イベントがある。魅力的な器に出合えるように、互いにいい刺激になればと思っている。

花材 連翹（木犀科）

薔薇（薔薇科）

アンスリウムの葉（里芋科）

花器 格子柄陶花器

早春の投入

△3頁の花▽

仙溪

李すももの苔枝に赤と薄紅色の椿を取り合わせた投入。

李の枝には小さな白い花がところどころに咲きはじめている。

枝自体には華やかさや瑞々しさはないけれど、独特の自然味を感じる。味わいのある枝だ。

取り合わせを悩んだが、葉の照りが美しい二色の椿だけを選んだ。赤色濃淡の花色は艶やかに春の訪れを告げてくれる。椿の厚い葉は白い苔と対照的な生命力を見せて、互いに個性を強め合っている。いい取り合わせだと思う。

花器には濃い茶色の釉薬がかかった下無型しもながたの花瓶を選んだ。

花器の選び方によって、同じ花でも華やかになったり、雅趣がしゆを感じる花になったりする。父や母の器選びを思い出しながら、最近少しずつ納得のいく選択ができるようになったが、それでも時々後悔することもある。他人の意見を聞くのも大切で、櫻子はよく的確にアドバイスをしてくれる。

花をいけた後で、ゆつくりながめていると、いろんな思いがわいてくる。春の訪れを告げる木のまわりで、小鳥たちが遊んでいるようだ。

花材 李すもも（薔薇科）

椿二種（椿科）

花器 焦茶色下無花瓶





出会い花（6） 仙溪

啓翁桜 菜の花

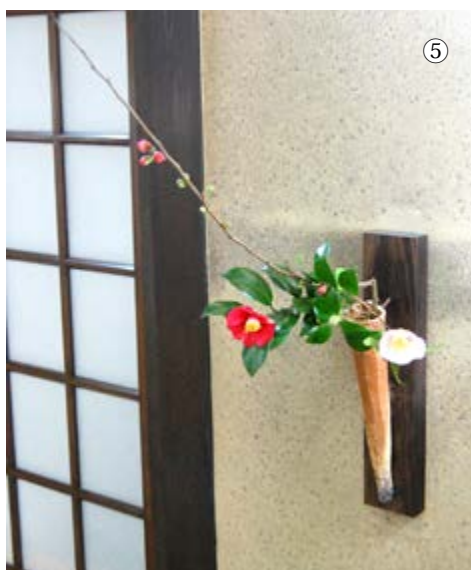
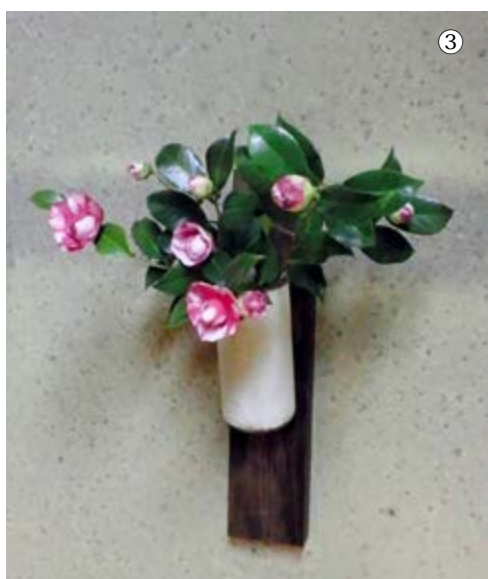
「いけばなのルーツは？」と問われたら何と答えますか。中国から伝わった仏花。神の依り代。室町時代の立て花。江戸時代に生まれた生花。など、どれも現在のいけばなに繋がる大切なルーツであるけれど、いけばなが「器に花をいけて楽しむ」ことであるなら、そのルーツは平安時代の宮中に見つけることができる。

清少納言の「枕草子」には、次のような描写がある。

おもしろく咲きたる桜を長く折りて、大きな瓶にさしたることをかしけれ。桜の直衣に出桂して、まらうどもあれ、御兄の君たちにて、そこ近くみて物なごうち言ひたる、いとをかし。（第4段より）

高欄（勾欄）のもとに書き瓶の大きなすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる（第23段より）

花をいけて心豊かに暮らすことのルーツは、平安時代の貴族の間で、ごく自然におこなわれていたと思われる。様式や型の伝承はもちろん大切だけれど、器に挿した花のいきい



きとした美しさを愛でる心こそ大切に伝えてゆきたい。

そんなことを思つて、ごく自然体で季節の枝と花を器に挿してみた。大きな青い瓶ではないが、繊細な赤と青の酒器にそれぞれ1本ずつ、啓

翁桜と菜の花を挿している。

花屋で気に入った花を買つて帰り、似合う器に挿してみる。置き場所も考えて。現代の「いとをかし」(とても趣がある)をいけてみよう。

掛け花 へ5頁の花へ

新鮮な花を数本いけるだけで、部屋の雰囲気がいづんと和む。それが季節の花ならなおさらいい。家の玄関には常に掛け花をいけているが、お越しになった人が最初に

目にするいけばなということもあって、小さいながらも気を遣う。

美しい葉、初々しい花で、季節の煌めきを感じてもらえるようにとの思いを込めていけている。さりげない花にこそ、いけばなの心と技は現

れる。日頃の稽古の積み重ねが大事。

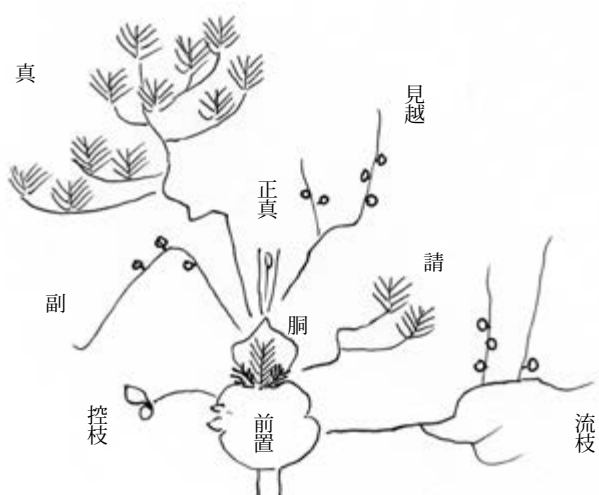
- ①白梅、南天の葉と実。
- ②出雲天社数椿、枝垂柳。
- ③椿(紅白絞り小輪)。
- ④白梅、南天の実。
- ⑤朱木瓜、赤椿、白椿。

第35回 京都名流いけばな展

会期 2月11日(火)～16日(日)

会場 JR京都駅新幹線コンコース

桑原仙溪 立花 行の花形 赤松 五葉松 木瓜 椿 水仙 花器 青銅立花瓶





桃
 花型 草型 副流し
 花器 煤竹筒
 仙溪



桃 〆9頁の花〆 仙溪

花型 草型 副流し

花器 煤竹竹筒

三月三日は桃の節句。清少納言の「枕草子」には次のように書かれている。

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。

旧暦からおおよそ一ヶ月ずれた現在の三月初旬では桃はまだ固い蕾だが、平安時代には温かな日射しの中で微笑むように咲き始めていたようだ。桃の花が開くことになんともいえない風情を感じる心は、きつと昔も今も変わらない。桃園はなくとも、いけばなで花を楽しむことができる。桃の花を愛でて、古の暮らしに思いを馳せるのも、いとをかし。



早春の定番

〆10頁の花〆

仙溪

花もの花材を三種類組み合わせた早春定番の盛花。チューリップと



スイートピーは色んな花色があるので、色の組み合わせ方を変えると雰囲気も変わる。チューリップと菜の花は伸びてくるので時々いけ直すといい。スイートピーは花持ちがずいぶん良くなった。

花材 チューリップ（百合科）

菜の花（油菜科）

スイートピー（豆科）

花器 トルコブルー陶花器

白花桃 薊

△11頁の花▽ 仙溪

花屋で満開になった白花の花桃を見つけたので、深紅の薊を合わせて、大好きな手付花器にいけた。いい花材に巡り合ったら、とっておきの器にいけて楽しみたい。

花器の底にゴム敷きを敷いて砂利（小石）を深さの三分の一くらい入れて平らにし、その上に大きな剣山を置いていけている。器を考えたり、いけ方を工夫するなど、手間を惜しまないことが、花材の品格に対する礼儀だと思う。

薊は水揚げが難しいが、切り花にはよく持つ品種がある。桃は花の中に芋虫がいることがあるので、見つけてはピンセットで退治する。

花材 花桃（薔薇科）

薊（菊科）

花器 手付陶コンボート



白花満作

櫻子

糸状の白い花が枝の先端に無数に集まってブラシのような形をしている。初めて出会う不思議な花なので、葉の出ていない枝の姿をそのまま見せるように、小さな花の黒百合を取り合わせ、足元に庭から路の臺を切ってきて加えた。小さな路の葉も入れている。

花屋では穂咲満作と呼んでいたが、一般には白花満作、もしくはフオザギラ・マヨールと呼ばれている。

北アメリカ原産の落葉低木で、春に咲く白い花は花弁ではなく雄しべである。花は甘い香りがする。花に少し遅れて出る葉は、秋に美しく紅葉するらしい。

日本の林に咲く一人静に花の感じが似ている。日本の野の花と合わせても違和感がなさそうだ。白花満作はアメリカのどんなところに咲くのだろう。そこにはどんな動物がいるんだろう。鳥の鳴き声。風の音。想像をふくらませて、花の故郷に思いを馳せるのも楽しい。

花材 白花満作（満作科）

黒百合（百合科）

路の臺（菊科）

花器 水色ガラスコンポート

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
3 月号
No.621

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



金魚草の秘密

△表紙の花▽ 櫻子

今年も寒い頃から立派な金魚草が売られていた。小、中くらいの丈の花は花壇に植えられているが、大きいものは切り花に向いているらしく色も多彩になってきた。地中海沿岸（南欧〜北アフリカ）の園芸種の花で本来は5月頃が咲く季節だと思う。

日本や中国では金魚草だが、アメリカでは噛みつく龍、ギリシアでは鼻のような、フランスでは狼の口という名前と呼ばれる。古代の文明では霊的な力があるとされた。庭に植えると災いから守られ、食べると若さと美しさを取り戻すとか！。エディブルフラワーとして良く料理に添えられている金魚草だが、そうと知ってはいっても食べようとは思わない。

花材 金魚草（胡麻の葉草科）

小手毬（薔薇科）

ドラセナ（竜舌蘭科）

花器 ペルシヤ花瓶

生花二作

仙溪

△2頁の花▽

木瓜 椿

花型 草型 副流し 二種挿し
花器 紫紅彩花瓶 幾左田昌宏





△3頁の花▽

啓翁桜

花型 草型 副流し
花器 天女模様赤銅花瓶

この二作の生花の花器は、どちらも十三世家元ゆかりのものだ。

昨年春に京都青葉会の皆さんと一緒にイベントをさせていただいた時、その懇親の場に幾左田昌宏さんも来ておられた。京都陶雅会の西岡隆一さんと共に家元宅に來られたことを、つい昨日のことのようにお話くださった。

「こんな形でけへんか」と、十三世がアドバイスをして、同じ形をいくつか作られたそうだ。下無のかたち、繊細な口のつくり、作り手の高い技量と品格を感じる。「あの頃とにかくどんな形をつくつたらええんかわからんから」と云っておられたが、「ええもん作りたい、面白いもん作りたい」という氣持が人を出会わせるのだと思う。どんな世界でも、この氣持がないといものは生まれないのだ。

そしてこの銅器も十三世がデザインした一点物。口の広がり、立花や生花の水際を美しく見せてくれる。片側で天女が笛を吹き、反対側では舞い踊る。表面は部分的に赤みがかったているが、これは赤い漆を焼き付けてあるのだ。

これらの器に花をいけさせてもらえることに、感謝している。



啓翁桜一色の立花

仙溪

花型 除真立花 行の花形

「請上り立」

花材 啓翁桜（真）副 見越

請 流枝 控枝

アイリス（正真）

松（胴）椿（前置）

花器 陶花瓶

昨年3月の立花研修会で立てた立花。「行の花型、請上り立」という花形で、請の出口を基本よりも高くしている。竹などの下へなびくような枝を請にするための花形で、桜の枝が川面に枝を伸ばす光景を思い描いて、請の枝先を下へさせている。

写真で見ると、もう少し請の出口に近いところで撓めて、ビュンと下へさげてもよかった。それと流枝の出口が高すぎた。太い幹を加えればよかった、などと反省点があれば見えてくる。

本来、桜一色の立花には他の花を混ぜないことと書かれているが、啓翁桜のように華奢な枝の場合は花を添えてもいいだろう。



立花秘傳抄 五

九品の花形立様の事

極真立

極真の立花は、祝言第一にして、心しん若松のす
ぐなるに、枝三段五段を用ゆ。心の高さ瓶に二
長半たけ。又は一長半。古来の説同じからず。近代
は三具足みつぐそく、さまざまに替わり、定法なきに似たり。
然れども蠟燭ろうそく立ての高さに随したがいて、立様口伝あ
り。大かた仏前の様子、三具足の大小にしたが
いて、時によりしく立つべきなり。

心かくしは、禿松かむろ、芍薬、菊などの、かたち
丸き物。心に取りあいて、副を付くるに、たよ
りあり。ほそき物は、心のみきほそきゆへ、取
り合いあしきなり。草木にかぎらず、出生直すくな
る物、皆心かくしに用ゆ。一の枝と、心かくし
との間、一寸二寸、花形の大小によりてあくる

なり。心かくしは心の前を守りて、心に勢いを
あらする役の物なり。

だてたる物なり。右へ出る物、副より長きはあ
るべからず。

副は心かくしの本より、物にたよらせて、し
だれたるもの。又はやわらかなる物を用うべし。
心の松のこわごわしきに、取り合いよろしきが
ためなり。これ花形の右の方を守りて、心をそ

直心立之内真之花形



第四図

立花 松直真

直心立之内真の花形 桑原正栄

松 蔓梅擬 菊 檜 柘植 杜若

檜扇 檜木 小菊 夏はぜ 柏

請は神前にては、影向の枝といい、仏前にては手向という。かならず時の珍花を用い、出生上へきおいたる物を用ゆ。副のしだれたる物との取り合いなり。出し所は、副と流枝とを見合い、その真中ほどより出すなり。左へ出る物、請より長く出る物なし。これ花形の左の上を、よくまもる道具なり。

見越は、心かくしの後ろより、木高く立ちのぼせて、請の方へなびかす。見越は心の後ろを守つて、心の勢をつよくなす物なり。後ろへ出る物、これより長きはあるべからず。

流枝は松にかぎりたる物なり。煙がへしとも、香炉のぞきとも名づく。瓶の口二寸ほど上、後ろ角より一文字に出して、葉先を香炉の真中にととむるなり。心すぐに、副なびき、請、きほいたるにより、流枝を一文字に指す。これ上の枝の取り合いよろしきがためなり。一瓶の内流枝よりひくく出す物なく、又水ぎわにてこれより長き物あるべからず。

前置の出口、流枝と同前。胴よりのうつりを請けて、左右へかたよらず、真向^{まむき}にたて、瓶の口をかくさず、前へ出る物、これより長きは有るべからず。ただし見越と、前置とは、前後の釣り合いなり。

胴作りとは、心かくしの下より、前置の上ま

でを云う。これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り、七つの枝を、よく養いそだつる物なり。

第五図

立花 松直真
直心立の内行の花形 桑原正栄
松 薄 躑躅 杜若 柘植 要 小菊
枇杷



控枝は、七つの枝の外なり。出し所は、請と流枝との真中より出す。請の方おもき時は、おもきものを用い、かるき時は、かるきを用ゆ。これ左右の軽重をはかる物なり。

直心立は、祝言第一の花なる故、仏前に立てるといへど、六花六葉、四花四葉、四草四木、雑木雑草、その外祝言にあらざる法度を守り、花形の格式すこしも背かず、草木きれいにすなおなるを用い、長高く、幽玄に指すを本意とするなり。古人曰く、真の花形と云うは、たとえば人の面のごとし。目の有る所に目有り、鼻有る所にはなのつきたるように、いつもかわらぬ様にさすべしといえり。

直心立の花には、後ろに草を遣わず。草どもを流枝控枝の後ろにてとむることなし。これを山後に野を見とて、嫌うなり。

直心立、行の花形と云うは、心は笠松なり。流枝は松を用ゆ。七つの枝の出所、前に同じ。

胴前置は、すこしくるわせてもくるしからず。

同草の花形というは、心に梅、海棠、梅もどき、水木、檜、鶏頭などの直なるを用ゆ。七つの枝、出し所前に同じ。草の心の時は、見越、流枝、前置草にても苦しからず。惣て心松ならざるを、草の花形と名付く。

【注記】

極真立とは直真立のうち真の花形のこと。ここでの七つ道具の解説は、極真立に限っての約束事が含まれている点に注意。

第八図

立花 鶏頭直真
直心立の内草の花形 富春軒仙溪
鶏頭 柳 梅擬 菊 夏はぜ 擬玉珠
檉木 檜扇 伊吹



ポピー

櫻子

今年は立春を過ぎても寒い日が多く、花屋さんに並ぶ春の花達も咲くまではしばらく時間がかかったよう。固いつぼみのポピーは最初は下向きで頼りなさが。水切りして暖かい部屋に置いておくと、くつと顔を上げて蕾が二つに割れ、あつという

間に大きな花が咲いてきた。

この瞬間が楽しくて春は必ずポピーをいけている。少し細かったので、連翹と取り合わせた。枝ものとの合わせる事は珍しいが、連翹の優しい線がポピーの動きを助けてくれる。

スイスの公園で澄みきった青空の

下、光を集めたように咲く連翹と初夏の小麦畑でしっかりと力強く咲くヒナゲシの花は、今でもはつきりと目に浮かぶ。

花材 ポピー（罂粟科）
連翹（木犀科）

スイトピー（豆科）

花器 白磁花瓶





山茱萸の投入

△10頁の花▽ 仙溪

枝を三種に花一種のとり合わせ。
春の花木は葉がないので、椿を添えて水際に繁みをつくることがある。添える花は菊、アイリス、透し百合、鉄砲百合など、和の雰囲気合うものが多い。

花材 山茱萸（水木科）

椿（椿科）

菊（菊科）

花器 赤茶釉陶花瓶

波紋の器

△11頁の花▽ 仙溪

広々とした麦畑。春の風で穂が波打つ。この器の表面の模様も、目には見えない風を、目に見える形にしたかのような流れだ。

宮永東山氏の器は、幾何学的な面と面が組み合わさってできている。その面の表にもまた幾何学模様の連続がぐるりと一周する。硬い質感と柔らかなフォルム。不思議な器だ。

まだ冷たさを含んだ春一番の風に目を覚ました花たち。そんなテーマでいけてみた。アルストロメリアを低くいけて、野の花のように見せている。

花材 青麦（稲科）

矢車菊（菊科）

アルストロメリア（彼岸花科）

花器 五面青白磁壺 宮永東山作



被曝対策

仙溪

2月24日、東京電力の発表によると、福島第一原発から高濃度の放射性物質を含む水が海に漏れ続けていることが明らかになった。それも昨年4月に把握しながら公表せず、対策もしていない。流れ出続けているものには、体内に取り込むことで体を蝕む大変危険な核種が含まれている。

そろそろ私達は本来知らされるべき危険について、隠されているのではと疑ってかかったほうがいいようだ。自分達の身は自分達で守る、そのために情報交換が大切になってくる。

心配しすぎてもいけないのだが、命あつての物種である。放射能の(正しい)知識を身につけて、その対策を講じつつ、元氣はつらつで！



出合い花（17）

仙溪

チューリップ

ガーベラ

朝は私がコーヒーをいれる。愛用のマグカップは、仙齋&素子からのプレゼントで、櫻子は赤色、私は青色だ。かれこれ20年間お世話になっている。

シルクハットの男性が三日月に腰掛けて、赤いハートを持つ絵は、いかにも父が好みそうだ。書齋にいても、この絵のように心は自由に飛び回っていたのだと思う。

出合い花で一度いけてみたかったのが、チューリップとガーベラだ。どちらも種類が豊富なので、いろんな組み合わせが楽しめる。いける器は、お気に入りのマグカップにどうぞ。

花材 チューリップ（百合科）

ガーベラ（菊科）

花器 マグカップ&プレート

レモンだより

干支にちなんで。メ〜エ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
3 月号
No.633

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ミモザとアネモネ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 ミモザ（豆科）

アネモネ（金鳳花科）

花器 ブルーガラス花瓶

アネモネの鮮やかな花色が好きだ。特に赤色。アネモネを眺めていると、アートの世界に誘われるような感覚をおぼえる。それは絵の具のようにくつきりとした花色のせいなのか、花弁が美の女神の衣のように見えるためか、うまく云えないが不思議な魅力をもっている。

風の花という意味を持つアネモネは、春の太陽のようなミモザと合わせると、なんともいえない表情になる。

ミモザ（正確にはフサアカシア）はオーストラリア原産だが、南仏ではミモザ祭があるくらい特に愛されている。そんなミモザとアネモネは、まるでフランス印象派絵画のような組みあわせだと思う。

横から見た奥行き





春の草花

△3頁の花▽

櫻子

花材 微^{せう}(微科)

ラッパ水仙2種(彼岸花科)

スイートピー(豆科)

青麦(稲科)

花器 小判型陶水盤(伊藤典哲作)

春先になるとよく使う食器に乾山^{けんざん}写し春草紋向付^{せうくけ}というのがある。

スマシレやワラビ、ツクシが描いてあつて色絵の焼きものではないのに、その器に春のお料理を盛るとぱっと華やかで美味しそうに感じられる。

いけばなでもゼンマイやムギを添えるとほのぼのとした春の暖かさを感じるような季節感あふれる花になる。

実際に里山に行きゼンマイやワラビ、コゴミなどを摘むこともないし、自然の中ではその区別にも自信がないが、やっと訪れた待ち遠しかった春を料理でも花でも実感したい。

横から見た奥行き





二つ並べる

△4頁の花▽

仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

チューリップ（百合科）

菜の花（油菜科）

花器 陶水盤（伊藤典哲作）

稽古でいけた花を二つ並べてみた。それぞれ小さめにいけているが、置く間隔を工夫すれば、この調子で幾つでも増やして飾れそう。雪柳には自由に広がる動きがあるので、このような楽しみ方もできるのだらう。

横から見た奥行き



横から見た奥行き



桃といえば菜の花と取り合わせる事が多いが、今回はアナスタシア（大輪菊）といけてみた。
アナスタシアは一年中出荷されているようで、見慣れているけれども毎回その見事な咲き方には驚く。満開の状態では出荷されるので花が痛まないように一つずつネットで包んで守られている。固い蕾から咲く菊とは随分イメージも違うが、日持ちはそれほど変わらない。
おお振りで伸びやかな満開の花桃にも負けない力強さだ。桃の花がアナスタシアと美しさを競い合って、より美しく感じられる。

桃とアナスタシア

△表紙の花▽

櫻子

花材 桃（薔薇科）

菊 品種名アナスタシア

（菊科）

花器 飴色釉陶壺

新聞の上で瞑想するレモンちゃん



立華時勢粧を読む ②①

「立花名目並びに訓解」解説

「立花名目並びに訓解」では、立花の構成について誠に詳しく述べられている。実際には主になる九つの役枝（元は七つ）とそれ以外の部分について、経験を積みながら理解を深めてゆくことになる。
役枝その他の役割を簡単に説明する。

心（真） は一番高く立つ。除心は梢を正心の上に戻すのが常で、戻さない時もある。

正心（正真） は直心立では心の前に立て、心隠とも呼ぶ。除心立では中心に直立する。

副 は高く心に添い上り、心に勢いを持たせる役目。

請 は心の勢いを受け持つ役目。副とは対照的につくる。

見越 は遠くの高木を眺める心で。前置との釣り合い、正心との映りを考えて作る。除心の見越は左右高下を自由に作ってよい。

流枝 は水際低く横へ（長く）流れるように。

瓶の後ろ隅より出し、前置より前へ出ない。

前置 は花形の要、草木の根締め。水際の正面に長く出すのが真の前置。行、草の前置もある。ここまでが七つ枝。

胴 は瓶上の景所。縦横左右前後の大枝を育てる所。

控枝 は副の下。他との釣り合い。無しも可。

腰 は流枝、控枝の後ろ。心との釣り合い。

水際 は夏高く、冬低く。

かこいで見苦しい所を囲い、景色も作る。

谷洞 谷は胴の後ろ、正心の前。洞は流枝と前置の間。

つや は外より添え、内より頼らせて立てて、強々しいものを柔らかに見せる。

あしらひ は役枝に足りない要素を補う役目。

絵図を参考にして、直真立、除真立、一株砂物で、主な役枝とそれ以外の部分がどのように作られているのか見てみよう。

真の花形の主な役枝の図解（器の口から上）



胴作りと前置
その他（水際、かこい、谷、洞、つや、あしらひ）



第一図

行之花取



第二図

草之花取



第三図

行の花形の主な役枝（器の口から上）

請を際立たせるために見越を左後ろに出している



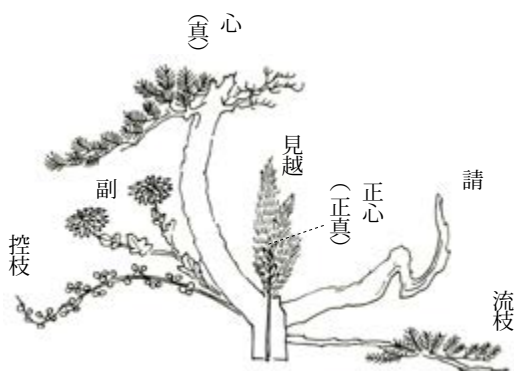
胴作りと前置

その他（水際、かこい、谷洞、つや、あしらい）



草の花形の主な役枝（器の口から上）

胴作りと前置
その他（水際、かこい、谷洞、つや、あしらい）





桜一色立花 (写真②) 仙溪

いけばなインターナショナル京都の例会で実演

烏丸ビルエントランスロビーに展示(上の写真)

先月号で紹介した藁駝さんの言葉。

「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導く。」

という境地に近づきたくて、河津桜の大きな枝を手に入れて、桜一色立花を立ててみた。ただし枝はほとんど撓めずに、針金を一切使わずに、全ての枝をただ込藁に挿すだけ。枝の足元を細く長く尖らせると、針金で括らなくても、自然に真っ直ぐ立ってくれた。

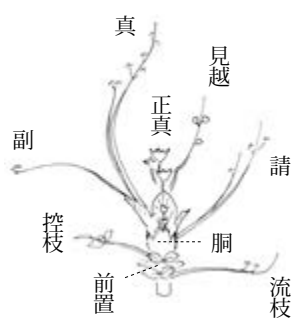
このような立て方は、デモンストレーションで立花を立てるところを見てもらう場合にも向いている。立花を鑑賞する時に針金が見えたのでは興ざめるが、実演においても、技術の解説のためならいいが、美しく立ててゆくなら、ただシンブルに込藁に挿してゆきだけで完成するのが理想的だと思う。

さて、出来映えとしては反省点も多いけれど、立て終えた時の花との一体感、新鮮な体験であった。

この桜の立花はビルのエントランスに飾らせて頂き、その後満開に咲いてくれた。咲いた花が美しく咲いてくれることが、一番の喜びである。

花型 除真
花材 河津桜
(薔薇科)
花器 銅立花瓶





請の枝にもう少し変化をつけて、
枝先も低くすべきたったと考えてい
る。

山茱萸の立花 仙溪
立花研修会の花
花型 除真
花材 山茱萸 木瓜 椿 菊
黒芽柳 小菊 枇杷
花器 陶花瓶 (矢野款一作)



ビルのエントランスに飾った桜一
色立花を横から見たところ。



椿の生花

仙溪

京都名流いけばな展出品作

花型 草型 副流し

花材 数椿（椿科）

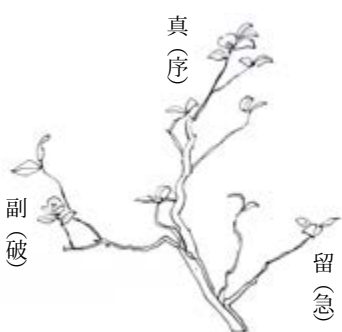
花器 銅薄端

背丈くらいある数椿の大きな1本の枝。枝の曲がりや位置を目で追ってゆく。どこで切って、どこで撓めればいいか。いけ上がりの大きさはどうか。個性的な枝を生かすことができるか。

椿で思い出すのは丹後の千年椿とドイツ・ピルニッツ城の椿。どちらも自由奔放に枝を伸ばしているのがいい。千年椿から感じるのとは自然の凄み。一方のピルニッツの椿は樹齢250年だが、冬の寒さで枯れないように、巨大な可動式温室で大切に守り育てられてきた。どうか次の年も花が咲いてほしいと願う人の思いの凄みを感じる。

自然と人の思い。この二つからい

けばなは生まれる。





出逢い花（27）

仙溪

猫柳（柳科）

チューリップ（百合科）

テーマは「春の光」。

八重咲きの個性的なチューリップを見つけたので、春を感じる枝との出逢いをいけようと決めた。

花屋には桜、連翹など、春の花木が並んでいたが、花穂のふくらんだ猫柳の一枝が目が止まった。

「出逢い花」をいける時に自分で決めていることがある。2種類の花材を選ぶのに、それぞれ必ず1本と1本の出逢いでいけること。なので、これと思う花や枝を吟味して選んで買わせてもらっている。

この猫柳は長い枝の先で写真のように枝分かれしていた部分を切っている。短くいけることで、綿毛の柔らかな光を身近に感じられて、より愛着がわく。チューリップも花と葉を切り分けて、小さく小さくいけている。

春の柔らかな光を感じる器は何にしようか。小さな枝と花をより輝かせてくれる器。チューリップの個性的な美しさと釣り合うモダンなデザイン。の器。そうだ、あれがあった。

ガラスの小鉢に丸剣山で花をいけて置くと、美しいお皿も花器になる。あとはうまく剣山を隠せるかどうか。花器 現代織部陶皿（柳原睦夫作）

ガラス小鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
3 月号
No.645

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





春の息吹

△表紙の花▽

桜子

花材 桜(桜科)

アネモネ(金鳳花科)

花器 ミリオクラダス(百合科)
手付陶水盤(柳原睦夫作)

ゼンマイはいけばなに春を感じさせてくれる。家の庭にも何種類かの羊歯が生えているが、若芽が伸びて、可愛い渦巻きに今年も出会えるのを楽しみにしている。

花屋さんで茎まで渦を巻いているゼンマイを見つけたので、アネモネと盛花にいけた。花器に選んだ水盤の底には紺地に桃色と黄色で雲のような模様が描かれていてなんとも春めいている。そして偶然にも金色の手も渦巻き状だ。なんという偶然。などと、一人で興奮しながら楽しくいけた。アネモネを低く挿して、ゼンマイの茎の動きを際立たせている。

横から見た奥行き





桃と桜

仙溪

△2頁の花▽

花材 桃（薔薇科）

花型 草型 副流し

花器 陶コンポート

△3頁の花▽

花材 啓翁桜（薔薇科）

花型 草型 副流し

花器 天女文銅花瓶

古い時代に中国から日本に伝わった桃。3月3日の節句にむけてお雛様を飾り、女の子の健やかな成長を願って桃をいける。桃の若枝のように力強くのび、桃の花のように、美しく優しい中にも芯の強さを持つて育ってほしい。桃はお節句に相応しい花だと思う。

そして古より日本で優しい花を咲かせてきた桜。私達の心に寄り添うように枝を伸ばしてくれる。今では世界で花を咲かせ、多くの人達に愛される桜たちのように、私達も優しさと思いやりを持つていたい。そんな思いをこめて桃と桜をいけた。



斜め横から見た桜の生花の奥行き



こ
で
まり
小手毬 椿

花材 小手毬 (薔薇科)

椿 (椿科)

仙溪

花型 二種挿し 草型 副流し

花器 青色釉陶鉢

バラ科シモツケ属のユデマリは、ほかの花材にはない曲線を描くところが魅力だ。いける時には足元を割

り、少し皮を削っておく。下方を真っ直ぐに撓め、真と副の枝を組み合わせてみて、いけあがりを想像する。

ツバキも主幹から出る横枝を生かすことを考えながら枝を観察する。どちらも元の姿を花型にどう生かすかがポイントとなる。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ③2

立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つつき)

紅葉

一色物。祝言。

鶏冠木けいかんぼく。順和名、紅楓こうふう。

唐詩

停車坐愛楓林晚

霜葉紅於二月花

諸書に載する所、楓葉を愛する事多し。但し和朝の紅葉とは少しかわりあるものか。

順徳院御歌

秋もはや時雨のころの色見草ちらまくお

しき山風ぞふく

蔵玉集

立田山秋はたてなる錦草時雨てめぐる峯

のよこ雲

同

小倉山しぐるころは鳴鹿のつま恋草の

いろものこぼれず

紅葉一色



第百十二図
立花 紅葉一色真
(初版では富春軒)
楓 晒木

唐詩：杜牧の「山行」より 車を停めて坐に愛す楓林の晩。霜葉は二月の花よりも紅なり。

楓の紅葉は本朝詩歌第一の景物にして、名を
いわずしてもみぢとばかり云うは楓の紅葉な
り。されば桜をもつては諸花のかしらとし、楓
をもつては紅葉の長とす。これ立花の賞翫極々
の秘伝なり。されば一色物と定めて外の木草を
まぜずして、楓ばかりをもつて一瓶を成就す。
名付けて真の一色と云う。

草の一色というのは、心、正心、副、請、流枝、
控枝等の長く用いる枝は紅葉を遣い、胴、前置、
根じめ、擁、艶、あしらいなどには生得紅葉す
ることなき草木を用いる。菊も白きを用いて色
有るを嫌うなり。これ紅葉を尊敬したる心なり。

立てまげて苦しからざる物、松、いぶき、黄楊、
枇杷、檜、白かし、かた檜、くまざき、小しだ、
白菊、著莪、かような類なり。外これを略す。

楓は葉付ひらめなる故、胴、正心に立てる枝
まれなる物なり。出生すぐなるを見立て用うべ
し。



第百十三図

立花 紅葉一色

(初版では富春軒)

楓 晒木 伊吹 栢植

檉木 菊

紅葉は瓶上に高雄山をうつして峰より染め、桜は瓶上に吉野山をうつして麓より咲くといえど、伝授おおくこれある事なり。初心のうちこれを立つべからず。

立花秘傳抄一の終

ここまでが「常磐木の部」である。一般に常磐木は常緑樹のことだが、立花秘傳抄の「常磐木の部」には落葉樹の夏櫨、栗、榎、百日紅、柳や紅葉が入られているのは、おそらく花木ものの以外の樹木全般という意味合いだろう。この後の「花の部」に桜、桃、梅といった花木が入られている。花材解説のはじめに「常磐木」が納められていることも意味のあることだと思う。

今号では紅葉一色を3図紹介する。彩色された絵図を見ると、他の花材を混ぜて立てた立花と砂物は山の麓から峰へと続く景色を表現していることがわかる。すなわち紅葉した枝とまだ青い枝を巧みに使いわけている。それに対して楓ばかりで立てた真の一色はまさに一本の楓の姿だ。全体が見事に紅葉し、日影に青葉が使われている。晒木を見え隠れさせて、楓の風格と幽玄を感じさせる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二巻』

(大日本華道界刊 思文閣出版刊)



第百十四図

一株砂物 紅葉一色
(初版では富春軒)
楓 晒木 伊吹 柘植 苔

サンゲイネアルブラの実 チューリップ3種 菜の花 (解説は10頁)



富春軒初春の会 (写真⑥)

家元宅での初春の会。3作の立花でお迎えし、お箏の演奏を聴きながら花手前をご覧いただいた。
 まず花をのせた花盆と水指を介添が用意。家元が部屋に入り、花をいける。それを介添が床の間へ移し、花台ほかの道具をさげる。そしてお正客によるお床の拝見という流れで進行してゆく。
 道具の準備やいける過程で花に込めた思いが伝わるように。花が置かれることよって心地よい風を感じてもらえれば。そんな思いで花手前をさせていただいた。





アルカンタレア・

サンゲイネアルブラ

〈9頁の花〉 櫻子

花材 サンゲイネアルブラの実

(パイナップル科)

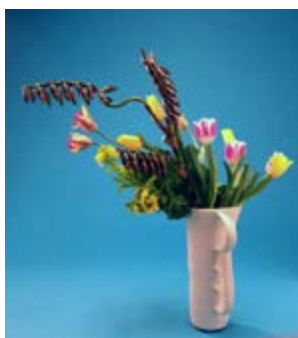
チューリップ3種(百合科)

菜の花(油菜科)

花器 手付陶花瓶

ロケット状の硬い実が串の歯のようについで結構な重みがある。サンゲイネアルブラという名でフィリピンからの輸入だそうだ。濃い色の花でシックにまとめるのもいいが、春らしい色彩の花と共に白い不思議な形の器に比べてみた。トロピカルに、リズムカルに。

横から見た奥行き



桃の紅白

仙溪

〈10頁の花〉

花材 桃白花(薔薇科)



ラッパ水仙（彼岸花科）

柘植（柘植科）

花器 銚子釉陶鉢

△11頁の花▽

花材 桃（薔薇科）

鉄砲百合（百合科）

スイートピー（豆科）

花器 碧釉陶花器（竹内眞三郎作）

紅白の桃の盛花と投入。

白花の桃の盛花は、洋花のラッパスイセンをいけているが、枯淡な桃の枝振りにあわせてツゲで足元をつくることで、静かな春の訪れを感じる自然調ないけばなになっている。

一方投入は、八重の桃色の花が潑刺と咲く桃の大枝に、薄桃色のスイートピーと純白のテッポウユリを合わせて、勢いのある現代調のいけばなにした。

花器の選択も雰囲気に合わせている。品格と華やぎ。男雛と女雛になぞらえて見て頂くのも一興かと。

横から見た奥行き



出逢い花（28） 仙溪

シーグレイプ（蓼^{たで}科）

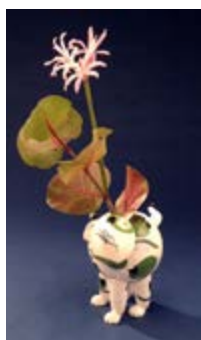
アメリカネス（彼岸花科）

花器 猫形ポット

（ビレロイ&ポツホ製）

21年前ドイツのケルンで「花ふたり旅」撮影のために購入した猫ポット。ネズミの蓋がついている。シーグレイプの丸い葉を見てこの器を思い出した。両親との思い出が詰まった大切な器。今後時々使ってみよう。アメリカネスはアマリリスとネリネの交配種。

斜め上から見たところ



レモンちゃんが何か言ってます？
「お客さんにお茶だしてー」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
3 月号
No. 657

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





(表紙のいけばな解説Ⅱ4頁)

純米吟醸「仙櫻」せんざくら

偶然にも私達二人の名前が合わさったお酒をお弟子さんが見つけてくださった。但馬の国の長寿の桜養父市大屋町)がこの名前で呼ばれているそう。

兵庫県赤粟市の山陽金酒造の純米吟醸酒で、蛇紋岩米をフナ原生林の自噴水で仕上げ、明延鉦山坑道の地底に寝かせて熟成させるそう。

自然の恵みが、人の手により発酵という過程を経て新たに生まれ変わる。お酒づくりも、人と自然の共同作業という点で、いけばなと同じだなと思う。

いけばなもいける人のイメージの醸成じょうせいによってより深いものになる。



陶の深鍋

△2頁の花▽ 櫻子

花材 桃 (薔薇科)

スイートピー (豆科)

菜の花 (油菜科)

花器 足付陶水指

桃の節句には女の子の健やかな成



長を願いたい。お料理も好きになつてね。そんな願いを込めて、深鍋を模した水指に桃をいけた。

横から見た奥行き



果物とラン

△3頁の花▽ 仙溪

花材 シンピジウム(蘭科)

晩白柚(蜜柑科)

花器 手付陶水指

南国の蘭をいけて、横に果物を添えると絵になつてくれる。果物は珍しい品種か、もしくは特別に色鮮やかなものを選びたい。大らかなシンピジウムには晩白柚がよく似合う。

横から見た奥行き





ランキンキュラス・ラックス

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ランキンキュラス(金鳳花科)

「ラックス・ピュタロス」

チューリップ(百合科)

花器 トルコ製真鍮バケツ

ランキンキュラスの新品種「ラックス」は花弁に光沢があるスプレー咲き。今後人気がでるだろう。



横から見た奥行き

2種でいける

△4頁の花▽ 仙溪

花材 木瓜(薔薇科)

アイリス(菖蒲科)

花器 黒白陶扁壺

良い花材なら、2種の出逢いを生かすいけ方を考えていけてみよう。



横から見た奥行き

天台圓淨宗大本山
ろさんじ

廬山寺 節分鬼おどり

京都の廬山寺（廬山天台講寺）では、2月3日に追儺式鬼法楽（通称 鬼おどり）が執り行われる。今年のご縁があつて、私と櫻子も豆まき役を務めさせていただいた。

人間の煩惱を表す赤、青、黒の鬼3匹が、邪気払いの弓矢と本堂での護摩焚きによって退散。その後境内に蓬菜豆や福餅がまかれ、それを参拝者が厄よけ開運を授かるために手を伸ばして取ろうとする。

豆は「魔滅」に通じ、邪気を追い払って一年の無病息災を願う。

廬山寺はもともと比叡山延暦寺の中興の祖である良源により天慶元年（938年）に京都の北山に創建された。良源は元三大師（1月3日が命日なので）、慈恵大師（朝廷から贈られた名）、また角大師、豆大師、降魔大師、魔除大師など多くの名前で親しまれている。

魔除のお札「角大師」は鬼守りとも呼ばれ、良源が鬼の姿になって疫病神を追い払った時の姿。廬山寺には良源が使ったとされる「降魔面」が伝わり、節分に特別開帳される。歴史ある行事に参加させていただけたことに感謝するとともに、皆さんの無病息災を切に願う。



角大師



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④3

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つつき)

仙人杖

非祝言。

本草綱目に云う、筍竹たけのこに成らんと欲すとき、立ちて死する(枯れる)者なり。俗に云う、竹子おいどまりの枯れたるなり。立花、砂物によろし。

鬼鍼きしん

非祝言。

竹のくろ根という。竹のかぶなり。砂物に専ら用いる。

鞭竹むちのたけ
べんちく

非祝言。

竹の根ふちに笹の付けるなり。水ぎわに低く用いる。竹五本とも遣いたる時は用うべし。二本三本の内にては用捨ようしやあるべきなり。

唐ささ くまざさ

祝言。水ぎわ。

やきばささとも云う。水際はかりに用いて、前置にはならずと云う説あれど、今様には前置に用いるをよしとす。両説なり。口伝。笹は水をあげがたし。一日も間のある花ならば

用捨ようしやすべし。冬はくるしからず。又笹の先切る事一枚はゆるす。二枚と切るべからず。

第二十九図

立花 竹除真

除真の内草の花形 桑原次郎兵衛
竹 嫩 枇杷 水仙 松 椿 栢植 梅 著我



先年、竹文化振興組合の季刊誌に竹について寄稿したので転載します。

「立華時勢粧」から

桑原専慶流十五世 家元
桑原仙溪

いつだったか、馴染みの竹屋さんのTシャツに印刷されている数字を見て、びっくり仰天したことがある。「創業1688年」。その同じ年に、桑原専慶流の流祖・桑原富春軒仙溪が「立華時勢粧」を出版しているのだ。なんとという偶然だろう。そんなご縁を思い出したので、「立華時勢粧」のことを書きたいと思う。

江戸時代の貞享5年、すなわち元禄元年に出版された「立華時勢粧」は木版による8冊本で、118の立花図が納められた「立花時勢粧」3冊と、立花の教えが詳しく書かれている「立花秘傳抄」5冊からなっている。

「立花秘傳抄」5冊のうちの3冊には、立花に使われる花材の解説が述べられているが、その内容は次のようになっている。

常磐木の部（35種）
松、檜、柳、楓など。

花の部（23種）
桜、梅、桃、つつじなど。

実の部（14種）

水木、梅擬、おもなど。

通用物の部（30種）

竹、牡丹、藤、南天など。

草の部（82種）

杜若、百合、蓮、菊、水仙など。

このようになってはいるが、ある時は和歌を引用し、またある時は中国の文献から生態について述べ、それぞれの花材をどのように使うべきかが事細かく書かれている。

さて、それでは「竹」について何が書かれているかを一部ご紹介してみよう。

竹

祝言。上中。

竹の字、形に象りてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱之の竹譜に云う、植物（う

ゆるもの）の中、名あり、竹という。剛からず、柔ならず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文なり。

戴凱之は中国南北朝時代（420～589）の植物学者で、現在の湖北省の人。「竹譜」という書物に竹の生態を詳しく書き残している。

その竹譜から引用しつつ、竹は「通用物」に入ると書かれている。

この通用物とは、江戸時代の花材

の分け方の一つで、草にも木にもなる花材のこと。

立花では

「木を山と見なし、草を野と詠め」

という教えがあるが、竹は山にも野にもなる重宝な花材というわけだ。

他にも竹の使い方として、

「葉は後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切る」

「下は水際より四五分にて必ず節を見せる」

「竹の前に苔晒木の太く直なるを立てること古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし」

「竹の子は砂の物によるし。立花に立てる時は竹の真より高く立のぼすべし」

「砂の物には大竹を賞翫とす。太き竹に葉の付きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを立ておき、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて真に用うべきなり。三本つかう時は、さび竹、くさり竹、仙人杖、切株竹など取り混ぜて使うべし」

「竹は切つて根を焼きて立つべし。又上の節を抜きて水を入れて立つべし」

以上はごく一部だが、竹に対する

思いの深さを感じる。

仙人杖（おい止まりの枯れたもの）

や、鬼鍼（竹のくる根）、鞭竹（竹の根ふちに笹のついたもの）も用いるとも書かれているが、私はまだい

けたことがない。

さて現在、私のいけばなにおける竹については恥ずかしながらそれほど多くの経験がない。近頃は花屋に頼んで金明竹を時々いけているが、金明竹は切つていけても葉が萎れにくく有難い。しかしながら、竹林が身近にない暮らしの中で、自分で竹を切つていける事は皆無に等しい。ご先祖様に申し訳ない限りだが、竹を交えた立花の幽玄さは、実際にいけてみないと味わえない。これから私の挑戦課題である。

「温故知新」という言葉があるように、私はこの「立華時勢粧」を読み返しながら、「自然」と向き合う上での、新たな教えに出逢う楽しさを、今感じている。

最近私が特に感動した教えについて紹介しておきたい。

それは立花秘傳抄の中の「立花色の事」に出てくる。

立花 色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云

う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に貪著するゆえ、必ず出生の景氣得がたし。また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体頭かなるべし。

藁駝曰く、古文「能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ」（註①）

この語、花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。

この中の「藁駝の教え」は中国中唐の文学者、柳宗元の「種樹郭橐駝傳」（註②）の引用だが、中国で生まれた千数百年前の珠玉のメッセージを、流祖を通じて受け取ったみたいなの、不思議なご縁を感じている。多くの人に知ってほしい内容なのだ。

「種樹郭橐駝傳」はインターネット上の、「小林益夫・風幡亭雑記帳」にその全文が紹介されているので、一読をお勧めすることで、寄稿の締めくくりと致します。気付きを共有できますことを祈って。

註① 意識「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことをしているだけである。」

註② 全文を「テキスト632号」に掲載しています。



サザンカ

仙溪

花材 山茶花(椿科)

花器 環付銅花瓶

「京都名流いけばな展」 出品作

2月に若生した古木の山茶花を生花にいてて出品したので、記録として掲載しておく。

サザンカは秋のはじめに咲きたして、冬の終わり頃まで長い間咲き続ける。他の花がほとんど無い時季に咲いて、私達の心を温めてくれる、そんな花である。

立花の場合、サザンカはツバキと同様に前置などの下段に使う。上段の役枝に使っても、あまり良い感じにはならないものである。

生花の場合も秋の実ものや、冬の柳などの根締めにしたたりするが、ある程度立派な枝であれば一種でいけて、サザンカの風情を楽しむことができる。

写真では枝葉の整理が足りないように感じるが、自然の勢いを優先している。古風な銅器とも合っていたが、口が小さいため水の減り方が早くて、毎日通ったけれど常にベストな水量を保てなかったことが反省点である。やはり生花は水面から立ち上る水際が大切な見せ場なので、花器の選択にも注意したい。



啓翁桜

花材 啓翁桜（薔薇科）
花器 煤竹竹筒

仙溪

ケイオウザクラは中国のミザクラ（実桜）を台木にして、ヒガンザクラ（彼岸桜）を接ぎ木した中から、枝変わりとして生まれたそうだ。いわば日中合作の桜である。

私達が日頃いけている花の多くも、元は様々な国の自然が、様々な国に渡り、様々な人によって作られてきたものである。トマトやジャガイモやカボチャといった野菜と同様に、それぞれの来歴を辿ってみると、世界各地の自然とつながりがあって面白い。

野菜を違う土地で育てると形も味も変化して、産地ごとに独特の品種が生まれたりする。植物は環境に適応するための努力を惜しまないということか。

私達人間も違う国の文化と融合したり、他国で自分自身が変化するのを感じたり、植物と同じだと思う。自国の文化を守ることも大事だが、進化するための変化もまた大切に思う。



横から見た奥行き



出逢い花（31）

仙溪

あぶらちゃんくすのき
油漉青（楠科）

椿（椿科）

花器 陶扁壺（八木一夫作）

久しぶりの出逢い花。

アブラチャンのひねた枝に赤椿を出逢わせた。

アブラチャンはアオモジやクロモジと同じくクロモジ属の落葉低木だが、花材として出るのは稀なようだが、跳ねるような枝の形がくつきりと見えるようにしている。

ずんぐりした器は片側が少しへこんで、金環食と名付けられた円が黒い線で象嵌されている。小指が入るくらい小さな口なので、出逢い花むきの器である。

金環食とは日食のこと。太陽に月が重なる稀有な現象を器に描くことで、神秘的な力を与えているように感じる。こういう器には味わい深い自然をいけたいと思う。

横から見た奥行き





スネークボール 櫻子

花材 アリウム・スネークボール

（百合科）

シキミア（蜜柑科）

花器 赤黒ガラス花器

はじめは3種でいけようと考えていたが、アリウムの曲がりくねった茎の重なり合いが思いの外面白かったので、赤いシキミアとの2種で赤い器にいけ、構成も色彩もシンプルにまとめてみた。

横から見た奥行き



レモンだより

新聞を読む邪魔をするのが好き。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
3 月号
No. 669

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ヒヤシンス

△2頁の花▽ 桜子

花材 猫柳（柳科）

ヒヤシンス（百合科・雉隠科）
きじかくし

青麦（稲科）

花器 ブルーガラス鉢

2月の料理教室の食卓にはヒヤシンスだけを金属で作られた銀色の筒型花器に飾った。立春前のもとても寒い日が続く頃、冷たい大地から春が溢れるように。花色は赤ピンク、白、クリーム、オレンジ、黄色、青、薄紫、濃紫と豊富で、どの色を選ぼうかと迷ったくらいだ。

もうずいぶん前から切花のヒヤシンスはミックスの多色で花屋さんで売られるようになった。安くはないがひとつの茎に沢山の花を咲かせてくれて、香りもうつりするくらい素晴らしい。葉も沢山ついていて素敵な花だと思う。丈が短いので折れ曲がらないように竹串を通してけると日もちもしてくれた。野生は青紫色。ブルーの花器と敷物が似合う。

横から見た奥行き



△表紙の花の解説は9頁▽



母のスカーフ

△ 3 頁の花 ∇ 櫻子

花材 アイリス（菖蒲科）

チューリップ（百合科）

宿根スイートピー（豆科）

花器 コスタボダ・ガラス器

母はシヨールやスカーフが好きで
沢山持っていた。好きなものに出会
うと迷わず一瞬にして自分のものに
するの、もひとつの才能？と思う事
もあった。ゆっくり買い物する時間
もなかったからかもしれない。ひと
つひとつが思い出のあるものばかり
なので、綺麗にして花の敷物にも使
っていいこうと思う。

ヒヤシンスの敷物はブルーのパ
シュミナ。チューリップとアイリス
には昔のシャネルのスカーフ。違
う使い方をすると新鮮に見える。父
が愛用したジャケットの端切れでも
妹が敷物を作ってくれた。裏には
MADE IN GREAT BRITAINと書かれ
てあって驚いてくる。

横から見た奥行き





紅柘植（紅黄楊）

△ 4 頁の花 △ 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

紅柘植（柘植科）

喇叭水仙（彼岸花科）

花器 溜塗木鉢

三重県鳥羽市菅島^{すがしま}の南斜面に群生するベニツゲは、冬に紅葉する珍しい品種で市の天然記念物となっている。艶やかな厚みのある丸い葉が密生するツゲは、「立花時勢粧」でも「立花第一の景物」とされ、伊勢浅間に紅葉するツゲがありこれを女つげと云う、と書かれている。

紅葉といっても黄土色から赤茶色の地味な色なので、ユキヤナギの明るい白とラッパスイセンの黄色をとり合わせて春を感じる盛花にした。

横から見た奥行き



葵^{あおい}

祝言、心にも用いる。中迄下る。

側金盞花^{そくきんさんか}。蜀葵^{からあおい}。

和名、かたみ草。

古歌

我思ひうつりて花の咲ならばかたみ草と
は何をいはまし

葵の心は赤白をまじえ、正心ともに三本或
いは五本立つべし。出生直にして働きなきも
のなれば、請、控枝、流枝にて花形風流に取
り組むべし。

葵の花は下より早く開きて、上ほど次第に
つぼみにつづきて見事ならず。正心に用いる
時は中ひらきの花のあたりより茎をきり、そ
の切り目見える時は、うつむきたる花を竹は
りをもってあおのかせ、切り目みえざるよう
に、花の精よろしく指すべきなり。横へ遣う
べからず。



第六十八図

立花 芦除真

寺田八郎兵衛

芦 葵 松 柘植 擬宝珠 要 小羊齒

小菊 杜若 百合 檜 鳶尾

桔梗ききょう

祝言、心にならず。

上中下。

異名、利女。房図。

古歌

木の葉をもうらにうたはや一重草葉もう
すやうの露はおけとも

この花里に作りたるは、花しげく茎ふとく、
野にはえたるは花すくなく茎ほそく立花によ
ろし。白、むらさき、八重、一重、それぞれ
に縁おもしろく、直なるは立てに遣い、たお
やかなるは横につかうに、針金をそえてたむ
る。急にたむれば早くしおれるなり。

女郎花おみなえし

祝言、正心にも用いる。

上より遣いさげて前置の上まで下る。花茎
の上に咲いて高くはえる物は、短く指すべか
らず。ほかこれになぞらえて知るべし。

和名、女倍之おみなえし。おもひ草。



第五十八図

立花 梅擬除真

西村松庵

梅擬 薄 松 仙翁花 柘植 熊笹 柏

桔梗 檜扇

雁^{がん}緋^び

祝言。中横に遣わす。

異名、剪^{せん}羅^ら花（葉ならび生じて剪のごとし。

又花の形まどかにしてはさみなすがごとし、故に名付く。）。

松本仙翁^{せんのおけ}花

右に同じ。

仙翁花

祝言、正心より中まで下る。

漢宮秋。嵯峨の仙翁寺より始めて出る故に名付くと云えり、覚束なし。

和名、紅梅草。

古歌

秋の野の紅梅草の色みれは春の心をまかせつるかな

右の三花は、本一草なれども時節^{ちせく}遅速あり、花も多少あるゆえ後人これを名付けならし。この花、瓶に指して水を欠くればしおるる也。

正心に用いる時小輪なるは宜^{よろ}しからず。二本にても三本にてもくみあわせて立つべきなり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第二巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第十図

立花 松除真

除心の内行の花形 流枝持立 富春軒

松 苔 百合 仙翁花 著我 木槿

柘植 嫩 小羊歯 桔梗





あかばなまんざく
赤花満作

〈表紙の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 満作（満作科）

数椿（椿科）

花器 陶花瓶「追想」（小川欣二作）

マンサクは早春に黄色の糸状4弁花を枝一面に咲かせる。マンサクより花が大きいシナマンサクは花色が濃く甘い香りがする。マンサクとシナマンサクの交配で多くの品種が生まれている。

アカバナマンサクは異国の感じがする。西洋的な図柄の花瓶に椿を合わせて生花にした。

かわつざくら
河津桜

〈9頁の花〉 仙溪

花型 草型 留流し

花材 河津桜（薔薇科）

花器 銅花瓶

京都駅での河津桜の生花。枝本来の姿を生かしてのびのびといけた。



初日の河津桜。上の写真は7日目。



花桃

仙溪

花材 桃 (薔薇科)

菊 (菊科)

花器 紫檀色釉花瓶

いけばな花材として生産されるのは矢口桃という八重咲き品種が多い。産地では早くに枝を切つて束にして水揚げをし、出荷する日に合わせ、遮光した20〜25℃の室(むろ)に約1週間置く「ふかし」を行う。空調や温度、湿度の管理が難しい。「立花時勢粧」には「枝ぶり素直にしてはたきなく・・・かわりたる花形も出来ざるものなれど」と書かれていて、桃を真にした立花には曲がりのある伊吹と優雅に枝垂れる山吹を加えている。

現代の盛花や投入では桃の素直さを生かしつつ、枝の勢いと花の優しい美しさを引き出した。

桃と菊はどちらも中国生まれの日本育ちなので相性がいい。素直に両者を投入にした。

横から見た奥行き





毎日ステーキ

健一郎

花型 砂の物

花材 松（松科）

白梅（薔薇科）

椿（椿科）

花器 銅砂鉢

「健ちゃん毎日ステーキを食べられる性格だな」と言われた事がある。同じことを新鮮そうにしている私のことを揶揄したものだ。祖父からの遺伝なのだろうか。毎日でも食べたくなる。実際にお肉を毎晩食べたいと副家元提案して見たら霧吹きで返り討ちにされた。今だけに妙案だと思っているのだが。

なぜ毎日お肉を食べることができののか分析して見たところ、どうやら感謝の気持ちと、今を感じる力が毎日お肉を美味しく食べるための秘訣なのではないかと思う。今を感じる力はその時の自分のコンディション、一緒に食事をする相手、話す内容など、毎日同じものではなく、その日その日の今を生きる力のことを指す。見かけの上では過去の場面と酷似しているように見えても全く別物だ。

日日は好日

あまりにも有名な雲門文偃（唐末の禅僧）の言葉だ。色々な解釈があるとは思いますが、私は肩肘を張らずにあくまで自然体でその時その時を全身で感じることで

はないかと自分なりに解釈をしている。

日々の出来事を新しく感じるためには豊かな感性が必要だ。同じものを見ても、人の数だけそのものを見た時の感じかたは異なる。Tボーンステーキを見た時に、アメリカみたいなステーキという解釈をする人もいれば、サロインとヒレの2つの味が楽しめるステーキで骨から近い部位なので骨液から旨み成分が染み出て美味しいよねと感じる人もいる。二人ではもちろん後者の方がお肉を毎日食べられそうだ。

物事を細かく捉える力が洗練されていくと、みんなにとつての同じものが同じもので無くなる。

今大学4年目の春休みを迎え、毎日自分のしたいことでスケジュールはいっぱいだ。どれも自分の興味を追求するものばかりで、大忙しだ。手当たり次第に片っ端からしたい事をする。将来になりたい自分と、自分の興味が一致しているのがまた面白い。今回の立花もしたいことの一環であり、将来になりたい自分に近づくための一歩である。

明日の事を考えると鼓動が早くなり、眠れなくなることがよくある。明日は何をしよう。あまりにもしたいことが多すぎて自分が今ここにいない時がたまにある。禅のトレーニングの一環で一ヶ月の間ステーキを食べるという提案を、改めて副家元してみようと思う。



シデコブシ

仙溪

花材 幣辛夷(木蓮科)

シンビジューム(蘭科)

花器 天目釉壺

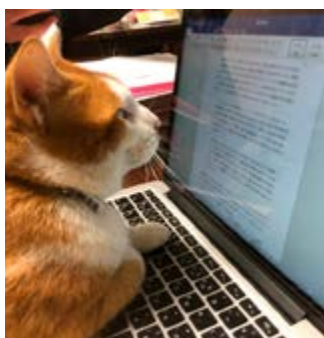
普通のコブシよりも細長い花弁を注連縄に吊す幣(紙垂)に見立てた名前。白花の他に薄紅色の品種がある。コブシは6弁花だがシデコブシはもっと多くて花により枚数が違う。黄色の蘭とすつきり2種でいけて、春の訪れを感じる投入に。



横から見た奥行き

レモンだより

健ちゃん卒論を手伝ってます。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
3 月号
No.681

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





辛夷 こぶし アイリス 椿

△表紙の花▽ 仙溪

花材 辛夷 (木蓮科)

アイリス (菖蒲科)

椿 (椿科)

花器 魚文陶花瓶

コブシの枝を切るとほのかに良い香りがした。何度も経験しているはずなのに毎回新鮮な驚きを感じる。そして手にした枝に愛着を覚える。そんなことも私が花をいける理由の一つなのだ。

横から見た奥行き



桜と躑躅 つつじ の立花

△2頁の花▽ 仙溪

花材 桜 (薔薇科)

躑躅 (躑躅科)

松 (松科)

椿 (椿科)

都忘れ (菊科)

花器 銅立花瓶

白い花が清らかな印象のサクラで



ある。葉は未だ出ていないのでマツで緑を添え、紅いツツジとツバキで赤みを加えた。蕾だった桜は満開に。京都の春の山景色。

横から見た奥行き



出逢い花 (36)

△3頁の花▽ 仙溪

かわつぎくら
河津桜 (薔薇科)

たちばな
橘 (蜜柑科)

花器 織部徳利 (東田茂正作)

雛飾りの桜と橘のイメージ。タチバナは寒暖の別なく常に生い茂るので「長寿瑞祥」の願いをこめて。サコンノサクラウコンノタチバナ。

横から見た奥行き





節分の豆まき

△4頁上の花▽ 健一郎

花材 蠟梅（蠟梅科）
台杉（杉科）

花器 面取り焼締花瓶

「お兄さん、豆……」誰よりも通る大きな声で真っ赤な服をきて厚かましく大きなエコバックの口を広げている副家元が上からよく見える。福を受けるにはある程度、主体的な方がいいのかもしれない。

廬山寺の節分会は鬼踊りが有名

で、毎年楽しみにしている人が多い。

豆を貰う立場から、福をまく人にならさせてもらえたが、素直に福のお裾分けをできたと思う。大きすぎる器に入った溢れ出さんばかりに頂いた福を受け渡せた。福の仕組みについて詳しい訳ではないが、不思議なことにとだけ福をまいても、福は無くならない仕組みらしい。

1人が伸ばす手にその家族分の豆を欲しているのとするのならば、その会場は五倍にも多くの人が手を伸ばしているようなものかもしれない。

い。

そんな今年の節分に合わせ、花遊

びと称して手先の器用な知り合いにこしらえてもらった切り絵の鬼と共に花を生けた。へうでぶった切った無骨な花器に蠟梅の枝振り、枯れたダイスギが合っている。鬼はどんな所に住んでいるのだろう。

菜の花×てんとう虫

△4頁下の花▽ 健一郎

花材 菜の花（油菜科）
手作りのでんとう虫

花器 陶花器

去年に見た春の景色を花と器で表現した。実際に見たてんとう虫は一匹だったが、サイズと共に誇張した。日常の小さな発見をただの気づきだけで終わらせるのは少しもったいない。どれほどの火になるかわからないが、空気を送り込み、火種を大きくしなければ、すぐに忘れてしまい、火も消えてしまう。

ナノハナは咲いてしまうと葉が頼りなくなるので若いナノハナも混ぜて生けるとボリュームが出る。花遊びをする際に細工を頼んでいる知り合いに自分の構想を相談するといつもアイデアをくれる。全て自分で考え抜いた作品も楽しいが、複数人で作る作品は新鮮さに長けている。



「どうも、はじめまして。一緒にお風呂に入りますしうか。」

健一郎

「どうも、はじめまして。一緒にお風呂に入りますしうか。」

見ず知らず20やその兄ちゃんに、こんな事を突然言われて「はい、御、緒に」と答える人はいないだろう。しかしながらそこでYESを引き出す力が介護には必要である。認知症の方の介護がつくづく楽しいと思える。初めましての人と違和感無くお風呂に入るレベルにまで心を接近させ、お風呂にまで入るといふのだから。

見ず知らずの人とお風呂に入るなんて経験は今まではなかった。排泄と入浴。ただでさえ、プライバシー性が高く、手伝つてもらうことをためらってしまうものである。自我が芽生える前の赤ちゃんの排泄、入浴行為とは違い、以前までは一人でできていた事が難しくなり、羞恥心を覚えてしまった人からすれば、人に手伝つてもらうのはどれ程の辱めなのだろう。

肉体的な介護は少しのミスが大きなケガに繋がってしまうので気を使うが、ある程度の答えやマニュアルは用意されている。一方で心のケア

は十人十色で、正解もない。おまけにその日のコンディションで声の掛け方も変わる。

お風呂に入るだけならまだ良いかもしれない。もし仮に、排泄の失敗をしていたとする。トイレ、浴室にいくと自分の失敗を露呈する事になるので、絶対に便所にも浴室にも行きたくないはずだ。浴室へ行かなければいけない事は分かっている。でも、羞恥心が勝る。もし、無理やり連れて行かれようものならば強い拒否をするはずだ。暴言を働く人もいれば暴力で感情を吐き出す人もいる。僕も間違いないと思うだろう。

排泄の失敗は、放っておくと病気にもつながるが、何よりもまず気持ちが悪く、気分も沈んでくるはずだ。瞬間的にその人の懐に入り羞恥心を緩和させ注意を他の事柄に移さなければならぬ。

産声をあげてから身体的にできる事が少しずつ増えていき、やがて身体は下り坂に向かっていく。若いうちに身体を鍛えておくと、身体能力の低下を遅らせることが出来るので、身体を動かすことは大切だ。歳を重ねれば重ねるほど体の衰えに抗う事は難しくなる。

近頃、人間はそんなに体を動かさ

なくても生活する事ができるようになった。今や座っているだけで世界中を飛び回れる時代なのだ。石器時代の祖先達がスポーツジムで人々が懸命に走っている光景を目にしたら、なんておかしな事をしているのだろうと驚かれるに違いない。猿からヒトへの境目は分からないが、7万年前の認知革命以降、ヒトに認知能力の劇的な変化が起こったと言われている。周りの環境に合わせて生きる道ではなく、周りの環境を変える発想に至ったわけである。

いつからだろう。ヒトが動く事はじめに面倒だと考えたのは、お肉を狩りに行く時代から買いに行く時代になったのは、現代は肉体の負担を減らすための工夫の結晶である街や文化。祖先達によつて作られた地球の直線上で生活をしている。

今ある便利は、祖先の面倒臭いから始まっている。生まれた時からそこにあつた物の作り方も直し方も僕は知らない。そのせいか、自動車よりも自転車の方が好きなのがある。もっとも、僕は外れた自転車のチェーンをなんとか取り付けるくらい能力しか持ち合わせていないのだが。

肉体に引き換え、脳は使えば使うほど、発達していき衰えることは無

いとされている。ならば脳を鍛えようと考えるのだが、脳に障害が起れば、低下の一途を辿るのである。例の一つに認知症というものがある。脳細胞の死滅や活動の低下により、認知機能に障害が起き、理解力や判断能力にも大きく影響してしまうのである。

グループホームで認知症の利用者の方達と生活していると、認知機能に障害がある事は確かだが、もっと根源的な、その人がどう生きてきたかという物が分かりやすい形で存在している。常に人に感謝して生きて

いる人、異性に気がある人、自分が心地よく過ごしていればいい人、愛情深い人、せっかちな人であつたりと、取り繕いのない純粋な姿を目の当たりにできる。面会に来られた子供にその片鱗が垣間見えた時には、遺伝という物を自分が発見したように少し嬉しくも感じる。自分が認知症になる姿を考える事は自分が何者か考える作業でもある。優秀こそないが成績発表のような物なのかもしれない。

僕より4倍生きた人達と生活するこの仕事は、いつも新しい価値観自分との発見で溢れている。その理由は利用者との心の距離である。家族ですら踏み込まなかったかもしれない所にまで心を接近させるのであ

る。隠し事なんてない。

よく自分の考えている事の相談をする事も、される事もある。美について尋ねると、美人である事と答える人。美しい心であると答える人。美人であると答えた方に、「もし意地悪な美人さんがいたらそれは美人ですか？」と尋ねるとそれは「美人じゃない」と答える。手を繋いで散歩していると、答えが出ないまま帰設する事になる。

話をしている中でも、年齢のためかやはり生死に関わる話が多い。死を目前にした人の言葉にはやはり、重みがある。死の体験談を聞くことはできないが、私と比べると死に近く、当事者意識が強い方の話は具体的にである。

真正面からその人を知り受けとめ、その人の顔色、仕草から心情をできるだけ正確な感情を想像し、適したケアをできたらなど考えている。

この力を磨いたその先に物を話さぬ植物の声を聞き、その特徴を理解し、その姿をより美しさを引き出す事ができるだろうか。



立花時勢粧の器 ④

「立花秘傳抄四・花瓶の事」(テキスト619参照)には

「花瓶図を考ふるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日日本に用いる所、唐の酒器なり。」

と述べられていて「唐の器」の絵が添えられている(図①)。そこで、立花瓶のルーツともいえる中国の青銅器の歴史をみてみよう。

青銅とは銅と錫の合金で、中国では紀元前3100年頃に石器時代から青銅器時代に移行したと考え



られている。紀元前1000年頃に殷(商)王朝が成立してからは、徐々に青銅の鑄造技術が発達し、その後の周、春秋時代まで(紀元前1000年頃)が青銅器時代に相当する。

殷や周の時代、青銅は貴重な金属で、王や貴族が権力の象徴として主に祭祀の器物を青銅で作った。宗廟に酒を供えるための「尊」も青銅で多く作られている。それらの表面に邪気を払い神靈との交信の場に相応しい畏怖を抱かせる獣面装飾が施されているのも特徴的である。

時代は下って日本の江戸時代前期に出版された百科事典「訓蒙図彙」にも「尊」や「觚」など中国伝来の器物が絵入りで紹介されている(図②)。初期の立花はそれら中国の青銅器に立てられたものと考えられるが、尊や觚といった口の広かった酒器を選んだのは何故だろう。今では水際の美しさのためと理由を見つけることができるが、広口の器に敢えて花を立てた最初の思いがどんなものだった

たのか。もしかすると、中国で古あつたのかもしれない。代から神靈との交信に使われた祭祀用の酒器を使うことに意味が

か、なぜ藁の束に立てたのか。立花のルーツについて探ってみた

訓蒙図彙

中村惕斎によって寛文6年(1666年)に著された図入り百科事典(類書)。全20巻。

天文・地理・居処・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獸・禽鳥・龍魚・蟲介・米穀・菜蔬・果蔬・樹竹・花草を絵と文で紹介している。



図②…国立国会図書館デジタルコレクションより転載



饕餮文の青銅器

△9頁の花▽ 仙溪

花型 草型 留流し
花材 山茶花(永木科)
花器 獸耳饕餮文銅花瓶

古代中国の王朝、殷・周の時代の彝器(宗廟に供える祭器で祭祀用の青銅器の総称)には、虎を見開きにしたような文様「饕餮文」が多く見られる。この睨みつけるような図像には、邪悪を避けて墓所を守護する願いが込められている。

サンシユウの枝先には生命の勢いを感じる。植物の力強さ美しさを表現するいけばなは、悪をはねのける清らかな力の象徴でもあると思う。



白川静「新訂 字統」より引用

横から見た奥行き



黄花の金魚草

△10頁の花▽ 櫻子

花材 木苺 (薔薇科)

金魚草 (胡麻の葉草科)

マーガレット (菊科)

花器 陶コンボート

キンギョソウにはいろんな色がある。色や大きさととり合わせる相手も変わる。鮮やかな黄色のキンギョソウは春の緑と相性がいい。白いマーガレットもキイチゴの蕾も、キンギョソウと一緒に上へ上へと伸びようとしているようだ。

横から見た奥行き



桃の古木

△11頁の花▽ 仙溪

花材 桃 (薔薇科)

アイリス (菖蒲科)

椿 (椿科)

花器 銅花器

切り花の桃は「矢口」という品種





レモンだより
エジプトの猫の女神「バステト」
と一緒に。



横から見た奥行き

が主で、産地で何度も枝切りするうちに幹は太くこつこつとしてくる。珍しく幹ごと売られていたので重量のある銅器でいけた。長年、若枝を提供してくれた親幹への敬意を込めて、艶やかな葉の純白の八重椿を添えた。



山茱萸の立花

健一郎

花材 山茱萸（水木科）

松（松科）

椿（椿科）

菊（菊科）

花器 陶花器（大台焼）

一本の山茱萸の木を立花という様式を借りて立てた。理想の型はまだ頭がない。

その時の枝ぶりや花のつき方をみて、良いと思ったら、良いと思った通りに生ける。

役枝一つ一つを考えながらゆつくりと枝どりをする。バランスを見ながらゆつくりと。喜びである。時間がかかればかかるほどその花の近くに居れるかのようだ。ゆつくりと自分の呼吸を山茱萸の呼吸に合わせていく。切り花になった山茱萸の息を吹き返させるかのように。まだまだ一本の木の迫力にも、遠く及ばない。切り花を根付きの大本にも見せる事ができるかが、花を触る者としての技量の見せ所である。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
3 月号
No. 693

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





早春のアマリリス

△2頁の花▽ 櫻子

花材 連翹れんぎょう もくせい（木犀科）

アマリリスひがんばな（彼岸花科）

花器 ガラス水盤

（ウルリカ・ヴァリーン作）

国産のアマリリスは1月末から2月中旬頃に出荷される。花茎に芯棒を入れてあげないと凍てついて折れ曲がる事もある。

今年は寒い日もあったが、しっかりと支えられて花が力強く咲き出してくれた。外国産の花色に比べると色は薄い、葉を沢山添えると鮮やかな赤あかだいだいいろ・橙色を感じることが出来る。レンギョウの鮮黄色もアマリリスの花色を引き立ててくれる。

コスタボダの金彩画の器に元氣いっぱい咲いて。

横から見た奥行





桃と菊

△ 3 頁の花 ∨ 仙溪

花材 桃 (薔薇科)

菊 2 種 (菊科)

花器 陶水盤

切り花の桃は「矢口」という品種が多い。加温して早く咲かせるには経験と勘が必要だそう。蕾の色が濃くて元気そうな枝を買い求めたい。

澁刺とした花色の桃が手に入ったので、大きめの水盤に菊と盛花にした。咲く季節は違いますが、ともに中国から渡ってきた花同士。しっくりと合っている。菊と桃には同質の秘めた強さを感じるからだろうか。春と秋の花を合わせるのに抵抗はあるが、分かった上であえて出逢いを楽しんでいる。

春に咲く菊の仲間だと、キンセンカ、シュンギク、マーガレット、ミヤコワスレ、ハルジオン、ヤグルマギク等々。でも桃と合わせにはみんな弱々しい。そう、大きく伸びた路の墓となら一度いけてみたい。





八重咲きチューリップ

△4頁の花▽ 桜子

花材 猫柳(柳科)

チューリップ(百合科)

花器 ガラス鉢

八重咲きのチューリップ、モンテオレンジとイエロー・マルガリータ。暖かくなると芍薬しやくやくの様に豪華に咲く。

八重咲きの魅力は花の形も葉も丸みがあつて可愛いらしく、いけるとミカンやレモンが並んだよう。

そういえば、店先に売られているキンカンを丁度見つけて食べたくなり、久しぶりに甘煮を炊いてみた。半割にしたキンカンの面はチューリップの笑顔のよう。

フワフワに膨らんできたネコヤナギの花芽も一緒に大きく膨らんできた。毎日伸びるチューリップと競い合うように。



インドのイメージ

△5頁の花▽ 仙溪

花材 ドラセナ・コルデイリネ
(竜舌蘭科)

シンピジウム(蘭科)

花器 トルコ手付銅鍋

ドクラの牛(真鍮製)

以前、インドで買った真鍮の牛。蠟型鑄造でつくられた鑄物で、5千年の歴史があるそう。『ドクラ』と呼ばれる職人が村々を回りながら使わなくなった金属製品を溶かしては神像などに作り直していた。

蜜蝋でつくった原型を粘土で包み、焼いて蠟を溶かし出すと鑄型ができる。蜜蝋には仏教三聖樹のひとつサラノキの樹脂も使われると聞いた。細く伸ばした蜜蝋で原型の表面を美しく装飾しておく、細かな部分まで金属が流れ込んで針金細工のようになる。金属は型に全て流れ込むのですしりと重い。

コルデイリネはオーストラリア原産だが、インド的な雰囲気がある。シンピジウムにもインドの種が入っている。古い銅鍋にそれらを盛って、ドクラの牛を飾った。赤い敷物はインドの大地。見ていると活力が湧いてくる。



人と花

仙溪

「人が花と在るあたたかさが身に染みる」

昨年12月号で菊の立花に添えられた健一郎の言葉なのだが、原稿を読んだ時に思わず唸らされた。確かにそう思う。いけばなの価値はそこにこそあるとさえ思う。

先日、植物園でしゃがみこんで写真を撮っている人を見かけたので行ってみると、か弱い小さな花が咲いていた。「セツブンソウ」の札が近くにあり、解説もつけられていた。

自然の輝きを見つけた喜びと言えば



セツブンソウ
植物園にて

いいだろう。少し大袈裟に言うなら生命の神秘に見とれてしまう。

そんな感動を植物園で味わえるのは、植物園の皆さんのお陰である。花を見て、人を感じ、再び感動する。

そんなことを考えていて気づいたことがある。いけばなも同じなのだ。

部屋に花がいてあると豊かな気持ちになる。花と器が生き生きとしてそこに在り、まわりの空間を活気づかせる。いけた人の花への愛情を感じると更に感動が深まる。

そんないけばなでありたいと思う。





エピデンドラム

△ 6 頁の花 ∇ 仙溪

花材 ユーカリ (フトモモ科)

エピデンドラム (蘭科)

花器 陶コンポート

エピデンドラムは中南米原産の蘭で、野生種は茎が数メートルになるらしい。春らしい色を選び、ユーカリを合わせた。



彼岸桜の生花

ひがなざくら

△ 8 頁の花 ∇ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花材 彼岸桜 (薔薇科)

花器 煤竹竹筒

彼岸桜に似る新しい品種らしい。花がうまく咲かなかったが、まだ出荷の試行錯誤中なのかな。桜をいけて楽しんでらおうと、様々にご苦労されているのだと思う。



人間は奇妙である。裸では健康でいられない珍しい生き物なのだ。時々服を着させられている犬を見る。ことがあるが、毛が無くなってしまうのとは心配している。私たちは猿人から人間へと進化する過程で、びつりと体を覆っていた毛を失った。それ以降、剥き出しになった皮膚が世界との接点になっている。

皮膚は人体を覆う最大の臓器であり、外界から身を守る役割になってしまった。そして皮膚の状態についてさまざまな方法で情報発信をする器官でもある。毛が無くなってしまうから、より触覚が発達したのではないだろうか。

猿は食べ物をわけてくれた相手に対して毛繕いをする。何かをやってくれたことへのお返し、感謝の心を伝え、信頼関係を築く方法のひとつであると考えられている。家では猫のレモンを撫でると、よく指を舐め返してくれる。愛情深いレモンは丹念に皮膚を舐めてくれる。ザラザラとした舌が僕の皮膚と接触するのだが、産毛しか生えないので申し訳なく思っている。そして用がなくとも体の一部を擦り寄せてくる事がある。そして互いに安心する。猿は怒ったりけんかをしたりしても、触れ合うことで気持ちを落ち着かせるのは、共同体が崩壊するのを防ぐための知恵だという。安心を得るには触れ合うことが、一番効果的なようだ。

幼い頃、お気に入りの布団があっ

た。その布団だとすぐに寝付くことができた。足の親指と人差し指で布団を摩つていると安心して寝ることができた。季節の変わり目に母親が布団を交換して仕舞い込んで出すようお願いしていたのを覚えていた。触覚がヒトに与える安らぎに大きな役割を果たしているのかもしれない。安心感を得られるタッチの力には、目を見張るものがあるのではないだろうか。

グループホームでは言語によるコミュニケーションより遙かに効果的な手段として触れることを意識している。足の裏をくすぐったり、雪が降った日には雪を投げ合う。顔に雪をつけたまま僕の背後を取るおばあちゃんは背中にも雪を入れてくる。二〇歳のおじいちゃんとの腕相撲は僕の50連勝中だ。椅子に座ると「お兄ちゃん、いつも頑張ってるな」と肩を揉んでもらい、ソファアールではクッションでじゃれ合う。毎日が本当に楽しい。もちろん一緒に料理をするとき火傷のリスクや、手を切るかもしれない。だが、利用者さん一人一人と向き合っている生き生きとした笑顔が見たくてつい、ちよっかいをかけてなくなる。座ってテレビを見ているだけで終わる1日は安全だが、余りにも刺激が弱いと考えているので、喜怒哀楽と何かに触れる時間を大切にケアをしている。

私の触覚経験で一番鮮明な記憶は、もみじの枝を折った事だろう。小学生の頃、公園によく出入りしていた。サッカーボールを蹴りにいく日や友達とカードゲームをする日。

そんな日常の中で枝にぶら下がったり、木登りをしたり、寝転んでは太陽を浴びた。次第にスポーツに打ち込み、公園にも通わなくなる。たしか、中学3年生の頃だった。自転車での帰り道、公園の前を通りがかった際、ふと見えた青楓があまりにも綺麗だったので引き返した。強く美しい青楓との再会の懐かしさで、喜びのあまり大枝に飛びつきぶら下がった。すると、その大枝はパツキツと大きな音をたてあっさりとは折れてしまった。その場に立ち込めたもみじの良い香りと、手に残った嫌な感覚が忘れられない。初めて植物の命と向き合うことができた瞬間でもあった。

触覚に安心感を与える力があるとするのなら、不快感を得ることも可能である。知らない人と街でカバンをぶつけられた時、もしくは接触がない場合にも皮膚が反応することがある。知らない人に会ったときや知らない場所に行ったときなど、何かの危険を感じるとゾクツとする子供の頃、ウール素材のタートルネックのセーターをよく着させられていたが、チクチクが堪えなく不快だった。そのセーターを見ただけで、チクチクするような気がしてゾワツとした。今より触覚が優れていたのだろう。残念なことに、今ではなんとも思わなくなってしまった。外界と身体的に接触している皮膚の感覚が鈍くなることは、世界を感じ取る力が減った事だと考えている。

最近、携帯電話を落としたら画面が割れた。指の腹で触つても割れた

とは感じないが、目で見ると割れている。不思議に思い、爪で割れた箇所を触ってみると、僅かなヒビ割れを認知することができた。爪を切つても痛くはないので、神経は通っていない。不思議だ。

私はこれを皮膚の延長線上である爪は触覚が拡張されたものであると考えた。例えばテニスのラケットを持つていれば、ラケットを振つて届く範囲まで身体感覚が拡張され、体の一部になる。義足の装着は訓練さえすれば、歩行することも可能となる。

光や音の波形を分析することで再現可能な視覚や聴覚と違い、触覚は最も正確に人に伝え難い複雑な五感である。なのでメガネや補聴器とは違い、義手義足を使いこなす事は努力なしには難しい。触感たらしめている要因が多すぎる。圧力、振動、質量、温度：まだまだあるだろう。そして触れ方によっても触れる体の部位によっても変化する。それだけ脳への刺激が多いことから触覚が感情を大きく動かすことも想像できる。

情報で溢れかえっている今、触覚が大切であると考えている。さらに時代は接触せずに物事をこなす方へ向かっている。「40度のお湯」ではなく「気持ちがいいお湯」、「小さい湯飲み」ではなく、「手ごころな湯飲み」といった具合に触れることについてよく考えるようになった。見て感じ

のいい湯飲みと、使いやすい湯飲みは同じではない。触覚を基準にした

美の定規を持つておく事が豊かさに繋がる。手の感覚で感じ取れるような大きさのことを「ころ」という。僕は目の前にあるものをすぐに指先で触つてしまふ。知りたい気持ちで満たされる。見えているだけの世界はどうも現実感がなく、物足りない。

僕が意識して使う、溶けるという動詞。自分とその場の輪郭線をぼかし、体を溶かし込む事は最大の感覚の拡張であり、その場になる事であると今は考えている。私はよく瞑想をするのだが、視覚を閉じ、耳を澄ませ、呼吸に意識を向ける。そうすると、その場に溶けるまでに自分の触覚と向き合うことになる。どのようなフォームで瞑想をするにしても、自分の皮膚と皮膚が触れる。僕は膝の上で親指と人差し指で輪つかをつくつているが、そうすると今ここに自分がいるという実感が強く湧く。面白いことに人は自分で自分を触らなければ自分を知覚できないらしい。そしてそれを忘れると、その場に溶けることができる。

花を見ていると、どうしてか触りたくなる。ヒトが花に触れるようになったのは毛がなくなったからではないだろうか。自分が毛で覆われている姿を想像すると植物の触り心地がまるで違つたであろうことは予想される。好きな感触も、嫌な感触もある。言葉が発達した今でも、伝えられなかった何かを植物で表現している。毛がないことを幸に思う。

松一色の立花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 除真立花 松一色

花材 松（松科）

晒木

花器 銅立花瓶

寢室で立てた立花である。5日ほどかけて少しづつ立てた。寝る時前に見て、目覚めて首を横向けるだけでそこにある。これだけ悩めるのは、生命力の強い松ならではだろう。存分に楽しむことができた。数日かけて立てたため、当初の見立てから大きく逸れたが納得いくまで向き合えた。火を絶やさないように焚べる薪割り、ジェノペーゼで使う松の実いけばなでお世話になりっぱなしの松だが、古来から世界中で愛でられてきた。生けるだけでなく、こういった多面的な付き合いはいけばなになった時に奥行きとして現れるかはまだ分からない。

横から見た奥行



京都新世代いけばな展

2021

#ハナノコキユウ

明日へのエナジー

会期 2月20日～23日

会場 京都府立植物園

出品 桑原健一郎

花材 連翹（木犀科）

小手毬（薔薇科）

椿（椿科）

花器 陶花器（市川博一作）

植物園には天井が無かった。広々とした空間に勢いのある連翹を豪快に生け、椿と小手毬を添えた。器が醸す釉薬の色が連翹の黄色とよく合う。強い風が吹くなか4日間来園者を魅了し続けてくれた。

健一郎



ストーブの前で本を読んでいるとレモンが足に乗ってきた。
(健一郎)

パールフット



① 壺から出たハスの花に立つラクシュミー像。2頭の象が女神の左右から水（ガンジスの聖水）を注ぎ祝福をする灌頂の構図。「ガジャ・ラクシュミー」と呼ばれている。中央インドのパールフット出土。紀元前2世紀。インド国立博物館。

出展：① https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ファイル:Gajalaxmi_Medallion_-_2nd_Century_BCE_-_Red_Sand_Stone_-_Bharhut_Stupa_Railing_Pillar_-_Madhya_Pradesh_-_Indian_Museum_-_Kolkata_2012-11-16_1837_Cropped.JPG

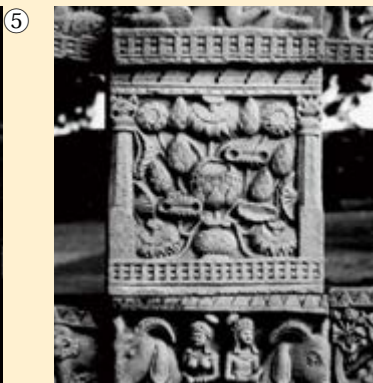
サーンチー



釈迦の遺骨は初め8つの仏塔（ストゥーパ）に分けられていたが、紀元前3世紀にアショーカ王が7つの仏塔の遺骨を取り出して8万4千の仏塔を建てて安置したという。中央インドのサーンチーに建てられた8つのうち3つが残っている。

② 仏塔の1つ。塔門や玉垣（欄干）は紀元前後に増やされた。

出展：②③④⑤ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049



③ 塔門には仏伝図や本生図のレリーフが。④ 壺からハスが生え出る図像「満瓶」。⑤ 熱帯スイレン（？）が亀の口から生え出ている。



古代インドの壺とハス

仙溪

インドの女神ラクシュミーはハスから生まれたとされる。図①では壺から出たハスの上に立つ姿で表されているが、仏像の蓮華台座を思い浮かべさせる。前回、スリランカのガードストーンやムーンストーンを紹介したが、そのあとで南インドの仏塔（ストゥーパ）にその原型を見つけた（図⑥⑦）。図⑥や図⑨の石板には仏塔が浮彫されている。図⑧は生命を生み出す豊穡の壺「満瓶」だが、図⑨の仏塔とどことなく似ていないだろうか。仏塔の上部が丸い壺に見える。

釈迦は生前に仏塔の造り方を指示しているが（※）、それによると覆鉢を塔身の上に置き、平頭を乗せ、傘を立てて相輪を重ねた上に宝瓶を置くこととされている。仏塔自体を大きな壺とするなら、先端の壺（宝瓶）と、舍利（遺骨）容器も含めると、壺を何重にも積み重ねていることになる。まるで宇宙の象徴として壺をとらえていたかのようだ。図⑩の太陽に見える大きなハスの開花模様は、あらゆる生命の原動力としての太陽をハスの花で表現したものだろう。図④⑤のハスやスイレンの図像で、その場を生き生きと活気づかせたかったのだと思う。

壺とハスは共に生命の不思議な力そのものであり、命が湧き出る源なのだ。日頃いけばなが空間を生き生きと活気づかせることに不思議な思いを持っていたが、古代インド人は壺や花の持つ力をすでに強く感じ取っていたのだ。

（※）根本説一切有部毘奈耶雜事・卷第十八に書かれている。

アマラーヴァティー



⑦



⑥

インド南部、クリシュナ川流域にあるアマラーヴァティーでは紀元前3世紀から紀元3世紀の建造物が発掘されている。大乘仏教を体系化したとされるナーガールジュナ(龍樹)ゆかりの地である。⑥アマラーヴァティー仏塔の装飾石板。仏塔がどのように造られたかが分かる。下中央にムーンストーン、その左右に壺がある ⑦別の石板にも満瓶(フルナ・カラサ)が確認できる。仏塔内部で宝輪のある玉座を崇拝している。

出展：⑥⑦⑧⑨⑩⑪ <https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati> マドラス博物館所蔵



⑨



⑧

⑧仏塔の柱断片の満瓶。ハスとスイレンが生え出た上にライオンと釈迦を象徴する玉座が積み重なる。 ⑨釈迦入滅後建てられた8仏塔の1つラーマグラマム仏塔(ネパール南部)の浮彫。蛇神ナーガが守護していたため、アショーカ王はここだけ舎利の取り出しを諦めた。



⑪



⑩

⑩玉垣の彫刻。日の出のようなハスの開花模様が彫られている。その下に怪魚マカラの口から植物が生まれ出る様子も。

⑪仏塔の模型。四方に門があり、どの方向から見ても図⑥の石板のように見える造りになっている。



桜一色の立花

仙溪

花型 除真立花

花材 八重桜（薔薇科）

貝塚伊吹（檜科）

鳴子百合（百合科）

花器 銅立花瓶

今年も桜の咲く季節が巡ってきた。数年前から各地に植えられているカワツザクラが、2月のまだ寒い頃から先駆けとして目を楽しませてくれた後で、いよいよお待ちかねのソメイヨシノが一斉に咲き始める。ソメイヨシノは江戸時代末期に江戸の染井村で生まれた品種で、エドヒガンとオオシマザクラの雑種が交雑してできたそうだ。

エドヒガンには山梨県の神代桜や岐阜県の薄墨桜など、千年を超える長寿の桜がり、京都円山公園の枝垂れ桜もエドヒガンの仲間だ。

人の寿命を遙かに超える大きな桜が人々の心に平安をもたらしてくれる。

大振りの八重桜を切り分けて、他に花を混ぜずに桜一色立花にした。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
3 月号
No. 705

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





エジプト花瓶

△2頁の花▽ 櫻子

花材 雪柳（薔薇科）

菜の花（油菜科）

レリア（蘭科）

花器 金属花器（エジプト製）

エジプト製の真鍮銀象嵌瓶。つい磨きすぎて最初の頃よりも大分色が違ってきた。金ピカの花器になってしまつて明るい春の花が似合うようだ。黄色い菜の花、カトレアに似たオレンジ、ピンク色のレリアをいけた。

今年は冷たい日が多く雪柳もまだ少し弱々しかったが、派手な色の中へ溶けこんで元気いっぱい。





ニオイイリス

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型

花材 ニオイイリス (菖蒲科) あやめ

花器 金属装飾陶水盤

(モロッコ製)

いけばな花材にアヤメの仲間が多い。日本のカキツバタ、ハナショウブ、シャガ、ヒオウギもアヤメ科だ。洋種では細い葉を広げるアイリス（オランダアヤメ）は春の花木との相性がいい。最近ではトルコ周辺原産のオクロレウカ（長大アイリス）の花もよく見かける。フリージア、グラジオオラスもアヤメ科。

それらに先駆けて早春にニオイイリスが咲く。地中海沿岸原産で芳香があり根茎から香料をとるのでこの名がある。白い花色に気品を感じる。この花を元にした紋章が長くフランス王家で使われてきたそうだ。西洋の花を東洋の感覚でいけた。





嫩葉（わかば）

△4頁の花▽ 仙溪

花材 金葉小手毬（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

ストック（油菜科）

花器 陶コンポート

「嫩」という字には「わかい・やわらかい・みずみずしい」といった意味があるので「嫩葉」を「わかば」とか「ふたば」と読む。「嫩」の音読みは「どん・のん」である。あまり使う事のない漢字だが、知っておくと何だか物知りになった気分を味わえる字だ。

今年も若葉の季節がやってくる。私達が寒い寒いと言っている間にも、植物たちは葉を広げる準備を怠らない。寒さに耐えた先に、温かな光の季節が来ることを知っているのだ。

金葉小手毬の若葉にストックとガーベラが優しく寄り添う。





花の勢い

△5頁の花▽ 健一郎

花材 連翹(木犀科)

椿(椿科)

花器 陶花器(市川博一作)

数え切れないほどの連翹の花。上品に光を反射させ、見事に咲いた椿。共に見事である。お花の前で寝転がると僕より大きい。大きさだけでなく強い勢いのある枝だった。溢れんばかりの生命力が紙面越しでも伝わる。華道家の喜びである。その内に大きな木を丸ごと家に引きずりこみそのような勢いだが、切花の美しさには特別なものがある。春が間近の好きな瞬間である。

花が見る夢

△表紙の花▽ 仙溪

花材 小手毬(薔薇科)

ガーベラ(菊科)

花器 陶コンポート

(柳原睦夫作)

この柳原睦夫さんの器は見ていてワクワクする。ピンクと黄色の雲が紺色の空に浮かんでいる。



メイちゃん大きくなりました。庭デビューの日、レモンちゃんが見守ってくれました。



る。模様からの連想で、コデマリを数本、白い雲がモクモクと湧き出るようにいけてみた。ガーベラで茜色を加えると夕暮れ時に赤く染まった空を思い出した。花の表情は器によつて変わる。コデマリの後ろに立てたガーベラは、雲に乗った夢を見ているような柔しげな顔をしている。



芍薬の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 生花 真型

花材 芍薬（牡丹科）

花器 耳付陶コンポート

花が咲くのは楽しみである。芍薬の花は咲く姿を想像するも、毎度その想像を超えた迫力を備えている。咲いた時を考え、あまり本数は入れない。少し葉に力がなく見えるのは花を咲かせた安心感からだろうか。間も無くして散った。





花の器

△7頁の花▽ 仙溪

花材 満天星（躑躅科）

石楠花（躑躅科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

「立花時勢粧」に使われている器の種類は96種類もあり、それぞれ形も装飾も違うので見ていて飽きない。またそれが器の上の立花の雰囲気と絶妙に合っているところが凄い。

今、家にある器も様々で、いきたい花に合う器を考えるのが楽しい。花が器を気に入って居心地良さそうに見える、そんな基準で選んでいる。

この写真のドウダンツツジもシャクナゲもかなり大きな枝である。竹内眞三郎氏の黒い岩のような器は、どっしりとした安心感と、切り立った崖のような緊張感を併せ持つ。挿した枝の風格を引き出してくれる。



『私とレモンとお花』

健一郎

家にいるレモン（飼い猫）は今年の5月で10歳になる。人間で言う56歳に相当するそう。家に来た頃は、僕より年下だったはずだが、随分と歳を追い越された。来年には家元と同じ年になり、じき追い越すだろう。

自分が感じた1分はレモンにとつての何分なのだろう。時間を数字で把握していないであろうレモンとの比較は難しいが面白いので考えてみることにした。こうして考え事をしていると時間がすぐに経つ。

思い返してみると、自分の落ち着きの無かった幼少期は時間が経つのがなんと遅かったことか。人一倍の体力を持ち、走り回るのにずっと付き合ってくれる人は珍しかった。特に大人に対しては大きな不服を申し立てていた。「いつまでゆっくりしてるの？」と母親に尋ねても、「今やっと休憩したとこやしもう少し休ませてよ」と返事が返って

きた際は時間の感覚のずれにイライラしていた。なんともゆっくりと動き、いつまでもつるぐのかと、大人という生物を不思議に思っていた。1分の違いに初めに違和感を覚えた時である。

いつだったかは忘れたが、面白い本を読んだ。その本によると体感時間と脈拍には大きな関係があるそう。つまり、体の大きな動物ほど時間はゆっくりと経過し、体の小さい動物ほど時間は早く経過する。同じ1分でも、生物によつて流れる時間が異なるというわけだ。

ゾウにはゾウの時間、ネコにはネコの時間、そして、ネズミにはネズミの時間と、それぞれ体のサイズに応じて、違う時間の単位があることを、生物学は教えてくれた。生物におけるこのような時間を、時計の時間と区別して、体感する時間と考える。体が16倍大きくなると二倍ゆつくりと時間が経過する。

この考えを是とするなら、同じ1分という時間でも、ゾウ

ウはとても短く感じるが、ネズミはとても長く感じていると考えられる。大人と子供の体感する時間と時計の時間の差と同じことが当てはまりそうである。平均すると大人と子供の脈拍の差が一分間に10以上ある。子供は脈拍が早いので、過ぎる時間が長く感じられるのだろう。

さらに、ハツカネズミの寿命は2〜3年、象は70年以上生きるが鼓動は20億回と同じであるそう。通常、生物の体の大きさに寿命が比例しているのだが、例外はある。人だ。医療の進歩で人の寿命は30歳ほどだったはずなのに今では80ほどになり、百年になるとも言われており、非常に興味深い個体であることは確かだ。

苦しいことをしている時は時間が長く感じるものと言われるが、それは、苦しいことをしていると拍動が速くなるので、それに伴つて体感する時間が遅く経過しているからだろう。つまり、体感する時間が早く経過し、時計の時間は遅く経過していると感

じるわけだ。

御神木として祀られているような常緑の大本などは1000年を超えた個体は数多く発見されている。動物で例えるならばエネルギーを大切に使い、大きな個体であるゾウにあたるのだろうか。それに比べ、広葉樹の桜などは数百年である。毎年花を咲かせ、葉を落としたりと忙しい。植物の脈拍を測ったことはないが、エネルギーをたくさん使っているハツカネズミと似ているところがある。

算数が得意でないので計算する気にもならないのだが、人にとつての1分と身近な木の感じる1分位は大きな隔たりがあることは間違いない。僕の曾祖父も見ていたであろう庭の寒椿は私たち家族のことをどう感じているのだろう。

1分の感じ方に大きな隔たりが植物と人の間では大きい。大人と子供の時間感覚の比ではない。少しでもゆつたりとした気持ちで、少しでも長く植物と居ることが、植物

に寄り添う事になるのだろう。

狩猟をしていた時代は木化けや、石化けをして獣や魚に人の気配を悟られないよう、木や石に化けていた。おそらく木や石に呼吸を合わせることなのだろう。狩猟はしなながなくなると大きな木や石の上で感じたあの感覚に近いものだろうか。見て感じるだけよりかはるかに本質的な何かを感じた。

人が植物と共にある事は考える以上に難しいことなのかもしれない。人は一緒にいた気になつていただけのことかもしれない。時間に追われて生けるお花は植物の気持ちを置いてけぼりにしているものになるだろう。

私とレモンとお花は一緒に時間をよく過ごす、同じ時間だけいても同じだけの時間は感じていないらしい。それぞれがそれぞれの時間の中に在る。

櫻之一色

花伝書を見る

立花 桜の一色

(初版では富春軒)

桜 苔木 万年青 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

立花時勢粧「桜の一色」

まるで1本の桜の大樹である。桜花の間に若葉が覗いている。山桜である。

桜は諸花の頭であり、桜を尊美す心をもって立てるためには、花の咲くことのない草木をあしらいだけに用いるようにし、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。

桜には晒木は使わず苔木を添えていることも自然を手本にした表れである。自然の美しさを敬う心を強く感じる。

桜一色は3図あり、この絵が最初に登場する。初版では作者は「富春軒」で題は「桜一色真」となっている。

る。後刷本では作者名と「真」が削られている。

立花時勢粧333年「花の芸術」展では桜一色に挑む予定だ。すでに本桜という品種の大枝を切って開花調整してくれている。私にとつて初めての桜一色を楽しみにしている。

仙溪





ランキンキュラス

△12頁の花▽ 桜子

花材 ランキンキュラス（金鳳花科）

アルストロメリア（百合科）

路の葉（菊科）

花器 金属裝飾陶水盤（モロッコ製）

黄色の色鮮やかなランキンキュラス。大輪で茎もしっかりと長く咲き続ける花になったのはいつ頃からだろう。昔はひ弱で足元に添えるだけの花だったのに。今は春の花として一番人気かもしれない。

家の近くにある花屋さんに入ると、正面の一番目立つ処に春は色んな彩りのスイトピーが売られている。夏から冬の間は殆どトルコキキョウで時々ヒマワリ、リンドウが置かれる事がある。

同じ花が色違いで7、8種類並べられるのだから素敵でうっとりしていつも数種類同じ花を買ってしまう。この場所に並べられる花は一番良く売れるはず。ランキンキュラスはまだそこに置かれた事はないが、沢山の種類が揃えば飾ってほしい。

高価な花だがびっくりするほど長く日持ちする。もう暫くするとランキンキュラス・シャルロットという

品種が出てくる。

アネモネのような咲き方でエキゾチックな花。

食卓に一輪だけ飾りたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
3 月号
No. 717

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





春の花木の投げ入れ

△表紙の花▽ 健一郎

連翹(木犀科)
れんぎょう もくせい

雪柳(薔薇科)
はら ばら

ベネチアン・レースグラス

花が密についている連翹を雪柳と共にかるやかに生けた。良き春の出会いである。バック紙と器の選択で自分が引き出した植物の魅力をより分かりやすい形で現すことができた。いけばなに限らずだが、構成する要素一つ一つのこだわりが一つの世界観を作り上げる。



可憐な風情

△2頁の花▽ 櫻子

スカビオサ(松虫草科)
まつむし草

チューリップ(百合科)

マイセン花瓶

スカビオサは葉の無い場合が多いが、花弁が複雑で微妙な色合いがあり、細い茎は針金のよ



う。たとえ葉を添えなくても充分に綺麗で瑞々しい。華奢な花器にいたなら、それだけで満足してしまう花だけど、作例ではチューリップを添えた。



枝の形にあわせる

△3頁の花▽ 仙溪

小手毬こでまり（薔薇科）

チューリップ（百合科）

陶花瓶（谷口良三作）

コデマリの足元にT字配りをしておくと、チューリップがいけやすくなる。コデマリの枝振りには千差万別。上下二段に出して、その姿に合わせてチューリップをいけてゆく。





サイズをあわせて

△ 4 頁の花▽ 仙溪

木苺 (薔薇科)

ヒヤシンス (キジカクシ科)

ストロベリーキャンドル (豆科)

陶花瓶 (崔龍熙作)

足元に咲く小さな花を2種出
合わせて、芽吹き始めた枝を足
し、小ぶりの器にいけた。キイ
チゴの若葉が広がり、花はどち
らもぐんぐん伸びてくる。ヒヤ
シンスの甘い香りも楽しめる。



頼もしい繁み

△ 5 頁の花▽ 仙溪

雪柳 (薔薇科)

アマリリス (彼岸花科)

金盞花 (菊科)

陶コンポート

キンセンカはあまりいけてこ



レモンとメイ
一緒にお花見ようよ！



なかったが丁寧な扱うことで豊かな緑と鮮やかな花色を楽しめる。時々全体を水で洗い、いけなおすと元気でいてくれる。
アマリリスとも仲が良さそうだ。ユキヤナギの白い花が爽やかに広がる。



陽光桜の生花

△ 6 頁の花 ∨ 健一郎

陽光桜 (薔薇科)

天女文銅花瓶

生花 草型 副流し

お気に入りの天女の器に桜の生花を生けた。毎年必ず咲いてきた桜だが、今年も咲くのかと心配になる時がある。2月の初め頃から気にするようになる。よつぼのことが無ければそうはならないのだがそんな不安を時々抱く。咲いた時は毎年心が動く。特別なお花である。

終介が家に来てくれた日から睡眠環境が変わったからか、最近、夢をよくみるようになった。今の所毎度お花が登場するのだが、へんてこな夢ばかりである。一説によると夢はモノクロであるらしいが、花が夢に登場すると、どうも夢はカラーなのではないのだろうかと思ってしまう。断片しか思い出せないことが多いが、大概は気分の良い夢で目が覚める。

今年も無事綺麗に桜が咲いてくれた。やれやれである。また同じ心配を春前にはするのだろうか。



アマリリスの生花

△ 7 頁の花 √ 仙溪

アマリリス（彼岸花科）

陶鉢

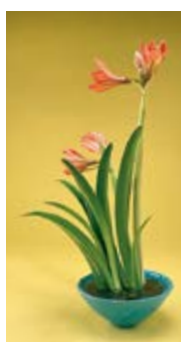
生花 行型

アマリリスは中南米、西インド諸島原産で約90種の種類があるそうだ。切り花でよくいけられるのは写真の品種だが、濃赤色やピンク、純白、絞り、八重咲き、剣弁、丸弁などの品種もあり、それぞれに違う雰囲気を持っている。

アマリリスの魅力は長い茎と力強い花の姿にある。珍しい品種は花だけで売られていて、アマリリスの立ち姿に何を合わせるかを考えるのが楽しい。

球根から出る葉は株の内側から次々と生まれ、花は古い葉と新しい葉の間から伸び出る。生花でいける時には花を後方に立て、葉はその前に挿す。

いけた時は真っ直ぐだった葉が少し反つてきて、花も咲いていい感じになってきた。



同砂之物

花伝書を見る

砂の物 桜一色

(富春軒…初版)

桜 万年青 伊吹 柘植

苔木 檜 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

男株と女株のバランスに軽重がなく、どちらの株にも正真と前置があるので行の砂の物である。苔生した太い幹が両株の土台となって、躍動する桜の枝をしっかりと支えている。

絵は平面だが実際は立体である。それぞれの枝の出方を思い描いてみよう。

左側、男株の苔幹はかなり大きそうだ。三方に分かれた一本の幹が前方へ傾いて出ているのだろう。直上する幹は、前から後ろへ曲がり、やや後方で立ち昇る見越の役割、その左の幹はぐいっと前方へ力

強く出ているように見える。

荒々しい男株の苔幹に対して女株では株の中心に真つ直ぐ立っている。静と動の対比が面白い。

太い苔幹から別れ出た苔枝はどんなふうに出ているのだろう。男株では前に出た太い幹から左やや前方へ。女株では直立した太い幹から右やや後方へ出ていると見た。

桜の枝の立体感も想像してみよう。男株で立ち昇る真は太い苔幹に添うように一度左前方へ出てから器の真上へ戻る丸みのある形。その左後方に副が、さらに左後方へ控枝が伸びる。正真の桜は株の中心に直立している。

女株の請は立派な横枝だ。

最初は右後ろへ出てやがて真横へ伸びる感じか。低く右下に伸びた流枝は株の後方から横へ、途中から前へ、最後は

真横へ。この後方の請と前方

の流枝で風を抱きかかえるイメージだ。伊吹にも万年青の葉にも風を感じる。



立花時勢粧の絵図は、実際に立てられたものが描かれている。その場に自分が居て見ているところを想像してみよう。

季節毎に花会を催して絵にしたとあるが、3作の桜一色は同じ時に立てたものか。立てた時は蕾だったのか。どんな場所で立てたのか。多くの人が見ただろうか。



いけばなは最先端！

仙溪

いけばな本来の魅力とは何だろう。

昨年3月の流展「花の芸術」いけばな展では大きな手応えを得られた。コロナ禍の中だったので入場者は少なかったけれど、「花が生き生きして見える」空間づくりにこだわったお陰で、いけばなが本来持っている力を今まで以上に効果的に感じてもらうことができた。

いけばなの魅力って何ですかと問われれば、その答えには色んなことが思い浮かぶが、最近特に感じているのは

自然の命を活かす芸術

ということ。シンプルだけれども大切な、いけばなが持っている最大の特徴だと思う。

先月、他流の先生方と企画した勉強会で講師を招いてお話を聞いた。テーマは「反集中」。NPO法人「ミラック」代表の西村勇哉さんは様々な職種・領域を超えて事業創出や研究開発を支援するお仕事をされているが、いけばなを客観視したお話を聞くことが出来た。

お話の多くはテクノロジーの過去・現在・未来について。過去のテクノロジーは予期せぬ出会いや発見が鍵となって生まれてきたが、新しいものを創造した人達に共通するの



花をいけることは
花のいのちとふれあうこと
いのちの手ざわりが
ひとの感性をはぐくむ



『反集中』NPO法人ミラック編
2,970円

22人の起業家、経営者、研究者が多彩な視点から世界の見方を語る。

「反集中」とは、見ようとするものごとの輪郭をはっきりさせるために、その輪郭の外側を意識するアプローチ。

『反集中』特設サイトで22編全ての記事を無料で読める。



は柔らかな思考の持ち主であること。その柔らかな思考は身体感覚によるところが大きく、微妙な違いや変化を感じ取れ、我々を通してをせず周囲の変化を受け入れる柔軟さを持つていた。そういうものを育むのにいけばなはとても効果があるのではないかと、というお話だった。

花をいける時、まず何も考えず手にした花を器にスツと入れて器と花の映りを確かめる事があるが、そんな時、花

花にゆだねる感覚。考えることよりも感じることを優先する柔らかな思考が、未知の美を引き寄せているのだと思う。

花の命を相手にして、花と一緒に心地よい場をつくるいけばなは、花に新たな輝きを与える一方で、いける過程で、いった後も、花が人に何らかの影響を与えている。

いける側が花の命を感じとり、その個性を器の上で活かすことができた時。器と花の絶妙な出逢いをつくれた時。いった花がその場の空気を生き生きと変化させた時。いけばなの力、花本来の力、自然の力を感じる。そのような体験は人の感性を豊かにする。固定観念に囚われず、多様

なものを受け入れる柔らかな感性が、世の中をより良くする気付きや発見、出会いを生んできた。いけばなは異なる個性を持つ花々の命に触れることで、柔らかな感性を養うのに役立つ。

願わくば、これから未来を切り開いていこうとする人には是非ともいけばなを体験してほしい。無心に花と向きあっていると新たな気付きがきつとあるはずだ。その根本には互いの命を大切にする心が育まれているはずだ。

「自然の命に触れることができ、身体感覚の新たな発掘になる点で、いけばなは最先端ですよ！」西村勇哉

声と言葉のあいだ

健一郎

柊介はよく泣き、少しずつ笑い、微妙な顔もする。よく話すようになった。というよりは、声を自分の感情に合わせて出そうとしているようにみえる。柊介の抽象度の高い声を大人たちは、好き勝手様々に言葉で解釈していく。言葉以外のものを言葉で解釈する。そんな様子を見るのは、美術鑑賞に近いものを感じながら聞いて楽しんでいる。

柊介も声を単語や意味の区切りを探しながら文節化し、自分が感じた感情をより正確に伝えようとする段階に入るのだろうか。この文節こそ、人が文化を形成したきつかけではないだろうかと言われている。柊介が言葉を覚える場に立ち会うことができるのは、大変光栄なことであるとともに、責任を感じるが、つい尊さから感じる可愛らしさと好奇心が勝って微笑んでしまう。

感情を言葉に置き換え直して

言葉を話すことになる。何か物事を感じることが無ければ言葉を使つて話す必要も、絵を描く必要もない。言葉はあくまで伝えるための手段としての一つの道具である。まず、私は物事に触れ感じとる事を大切にしている。そこに在る心地よさは心地よいものだ。感じとるセンサーの感受の度合いが言葉の選びや絵に影響を与えるわけだ。柊介には言葉のない世界で感じとる力を磨いて欲しく思っている。自身や外界を言葉を用いず、感じとることができるのはこの時期の特権である。

人が文化を形成するきつかけとなった言語。それを柊介に伝える事は、世話というよりは教育に分類されるだろう。教育の始まりを感じている。言葉を話すことに初めは感情と言葉に大きなズレが生じるだろう。そして言葉を上手に使うと自分の気持ちと一致する割合が高くなる。言葉に精通している人、または感情が豊かである人ほど、正確に伝えられないもどかしさからなのか、苦しうに見える。

そのもどかしさを認めた人の言葉からは、重みと説得力を感じている。そこから言葉の楽しさは始まるのだろう。

実際に、毎月文章として考えていることをまとめているが、溢れ出てくるだけで楽しさはない。納得の上、自信満々で掲載した覚えは一度もない。それに引き換え、自分が関わったいけばなに関してはほとんど毎度自分が納得いく物である。心底自分の花が好きであり、見ていられる。思っていることが現れ出ているのだろうか。自分だけではなく植物と共に在る心強さからか。いけばなが自分に合っている気がしている。

幼少期の頃ぐらいから、祖父と考える時間が好きだった。今は考えることも好きだが感じることに熱中している。そして今、柊介も多くを感じている。柊介と考えることができる日が来るのを楽しみにしている。



黄梅と松

健一郎

黄梅（木犀科）
おひまつ
老松（松科）

陶水盤（近藤豊作）

引き締まった格好の良い松。なかなかお目にかかることはない。どつしりと安定した松が勢いのある黄梅の枝を、一つのいけばなとして成り立たせているように見える。生けてしばらくしてからみると今の家元と僕の関係に似てるかもと感じた。この黄梅ぐらい動き回りたいものだ。

自分のしたいことをゆつくりと積み重ねていく。黄梅は撮影の後ゆつくりと蕾を全て咲かせ、松はいつまでも艶を保ち、美しく在った。

